

常楽寺柿木田古墳群

—常楽寺柿木田1号墳の調査—

一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

出雲市教育委員会

序

現在、一般国道9号の出雲市知井宮町から湖陵町三部間は、通過交通と生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに代替路線がなく、日常生活や地域経済に多大な影響を及ぼしています。そのため、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上および生活圏域の連携を促進することを目的として、出雲・湖陵道路を2008年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ、関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設予定地内にある遺跡について島根県教育委員会および出雲市の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本書は、2019年度および2020年度に実施した出雲市湖陵町地内に所在する常楽寺柿木田古墳群の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模や、埋葬施設である主体部の墓坑を3基確認することができ、出雲平野西南部の古墳時代前半期の様相を考えるうえで貴重な成果となりました。

本書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術ならびに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および本書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係機関の皆様に深く感謝いたします。

2021年3月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所長 藤田 修

序

本書は、出雲市が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて2019年度および2020年度に実施した、一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を取りまとめたものです。

本書で報告する常楽寺柿木田古墳群では、古墳時代前期末から中期初頭と考えられる常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模を確認し、また後円部の調査によって主体部の墓坑を3基確認することができました。常楽寺柿木田1号墳は湖陵町内で最も古い時期に築造された前方後円墳の可能性があり、出雲平野の西南部における古墳時代前半期の様相を解明するための重要な手掛かりになる発見となりました。

本書がこの地域の歴史を解明するための基礎資料として寄与するものとなることを願います。

また、出雲市としては、この貴重な文化財を後世に伝えるために調査・保護・活用に尽力してまいります。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたり、多大なるご理解とご協力をいただきました地元住民の皆様、調査指導者や助言者、および関係機関をはじめ、各方面の方々に心からお礼申しあげます。

2021年3月

出雲市教育委員会
教育長 杉谷 学

例　言

- 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、出雲市が2019（令和元）年度および2020（令和2）年度に実施した、一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う常楽寺柿木田古墳群（島根県出雲市湖陵町常楽寺940-5ほか）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 本書で報告する事業年度は下記のとおりである。

2019（令和元）年度 発掘調査・整理作業

2020（令和2）年度 整理作業・報告書作成・試掘確認調査

- 発掘調査・試掘確認調査および整理作業・報告書作成は以下の体制で実施した。

〈2019年度〉 事務局 木村 亨（出雲市市民文化部 次長兼文化財課課長）

大槻智徳（ 同 文化財課 課長補佐）

景山真二（ 同 課長補佐）

調査員 墓中光輔（ 同 主事）

臨時職員 宇畠豪志、吉田苑佳

室内整理作業員 前島浩子

〈2020年度〉 事務局 片寄友子（出雲市市民文化部 次長兼文化財課課長）

大槻智徳（ 同 文化財課 主査）

原 俊二（ 同 課長補佐）

調査員 墓中光輔（ 同 主任）

臨時職員 宇畠豪志、吉村香織

室内整理作業員 荒木恵理子、石原和子、妹尾順子、中島和恵、

吹野初子、前島浩子

- 発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々および機関からご指導、ご協力をいただいた。

ご芳名を列記し、謝意を捧げる（敬称略、所属は当時）。

島根県教育庁文化財課、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

池淵俊一（島根県教育庁文化財課調整監）、伊藤 智（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター管理課企画員）、

稲田陽介（島根県教育庁文化財課文化財保護主任）、岩崎孝平（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター主事）、

岩本 崇（島根大学法文学部准教授）、會下和宏（島根大学総合博物館教授）、角田徳幸（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター調整監・出雲市文化財保護審議会委員）、下條信行（愛媛大学名誉教授）、

椿 真治（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館学芸員）、

仁木 聰（島根県教育庁文化財企画員）、西尾克己（出雲市文化財保護審議会委員）、花谷 浩（出雲

弥生の森博物館館長）、曳野律夫（島根考古学会会員）、深田 浩（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査第一課長）、

松本岩雄（島根県立八雲立つ風土記の丘所長）、宮本正保（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査第二課長）、守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター管理課課長）

5. 報告書作成にあたって、奥中亮太氏（文化財調査コンサルタント株式会社）から玉稿を賜った。
6. 本書は、職員の協力を得て幡中が編集した。各章の執筆は、第4章（奥中）以外を幡中が行った。
7. 発掘調査作業（調査現場の安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、株式会社トーワエンジニアリングに委託した。
8. 本調査で実施した写真測量および俯瞰写真的撮影は、株式会社テクノシステムに委託した。
9. 本調査における3次元レーザー測量は、株式会社トーワエンジニアリングおよびTDM テック、航空レーザー測量は株式会社ウエスコに委託して実施した。3次元レーザー測量の計測データをもとにした赤色立体地図の作成は、アジア航測株式会社に委託した。
10. 本調査の自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した。
11. 本書に掲載した遺構・遺物の実測図は、調査員および臨時職員が作成した。
12. 本書に掲載した遺構・遺物の写真是、職員の協力を得て幡中が撮影した。
13. 本書で用いた測地系は世界測地系第III系であり、方位は座標北、レベルは海拔高を示す。
14. 本書掲載の第28図（図版29・30）の土師器は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの所蔵資料である。資料借用および作成図面と撮影写真的掲載について、同センターから2020（令和2）年9月29日付け島教埋第305号にて許可を得た。その他の遺物および実測図・写真是、出雲市教育委員会で保管している。
15. 本書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
ST-墓坑 SK-土坑 SD-溝 SS-礫敷

16. 本書における土師器・須恵器の型式および器種認定は、下記の論考・報告書を参照した。

赤澤秀則 1992「小結」『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 鳥取町教育委員会 73～81頁

池淵俊一編 2008 「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会 294～313頁

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 39～79頁
大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書 第8集 平田市教育委員会 43～54頁

松山智弘 1991「出雲における古墳時代前半期の上器の様相一大東式の再検討一」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会 1～29頁

松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 99～130頁

松山智弘 2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 198～209頁

松山智弘 2018「古墳出土土器をめぐって 山陰」「前期古墳編年を再考する」六一書房 161～174頁
渡邊 誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究～山陰地域を素材として～」『島根考古学会誌』 第26集 島根考古学会 25～60頁

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	14
第3章 発掘調査の成果	25
第1節 既往調査の成果とまとめ	25
第2節 発掘調査の成果	29
第3節 2020年度試掘確認調査の成果	59
第4節 出土遺物	60
第5節 小結	64
第4章 自然科学分析	75
常楽寺柿木田1号墳における後円部上の電気探査	75
第5章 総 括	83
第1節 常楽寺柿木田1号墳の墳丘盛土の定量分析	83
第2節 出雲平野周辺の墳丘上における葬送儀礼の場とその変遷	89
第6章 結 語	107

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図 一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に 係る遺跡位置図	2	第26図 前方部東西3トレンチ平面図・土層断面 および見通し図	51
第2図 常楽寺柿木田古墳群の位置と範囲	3	第27図 1・2トレンチ位置（上）と土層断面図（下） (2020年度試掘確認調査)	59
第3図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査位置 および発掘調査対象範囲	4	第28図 上師器実測図（2010年度試掘確認調査）	60
第4図 発掘調査状況	7	第29図 遺物実測図（2019年度発掘調査）	61
第5図 現地説明会状況	7	第30図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模	66
第6図 現地調査指導状況	7	第31図 墓坑STO01～STO03平面図（左）・ オルソ図（中）・赤色立体図（右）	67
第7図 2020年度試掘確認調査状況	10	第32図 常楽寺柿木田1号墳周辺の古墳時代前期・ 中期の主要遺跡と古墳（群）の位置	67
第8図 水洗篩別状況	10	第33図 墓坑に伴う排水溝検出状況	68
第9図 島根半島と出雲平野の古地形変遷 (中村2014に加筆)	12	第34図 磨群検出状況	69
第10図 常楽寺柿木田古墳群と出雲平野周辺の 主要遺跡	15	第35図 磨敷SS001検出状況	69
第11図 湖陵町周辺における古墳時代前期・中期の 主要遺跡の分布	21	第36図 出雲平野周辺の主な古墳時代前期・中期の 前方後円墳の分布	73
第12図 常楽寺柿木田古墳群周辺の主要遺跡の範囲 (上)と周辺の遠景(下)	24	第37図 2極法の電極配置	75
第13図 常楽寺柿木田1号墳の想定復元図 (左：野坂編2000 右：宮本編2019)	26	第38図 電極展開と探査深度	76
第14図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査および 発掘調査の位置と範囲	27	第39図 2次元逆解析フロー	76
第15図 常楽寺柿木田1号墳のトレンチと調査区位 位置および遺構全体図(2019年度発掘調査)	30	第40図 測線の設置図	77
第16図 墓坑STO01～STO03・排水溝および後円部 東西7トレンチ平面図・土層断面図	32	第41図 比抵抗断面図（その1）：A～L測線	78
第17図 後円部南北1・2トレンチおよび前方部 南北1トレンチ平面図・土層断面図	36	第42図 比抵抗断面図（その2）：M～U測線	79
第18図 くびれ部2トレンチおよび前方部東西 1トレンチ・南北2トレンチ平面図・ 土層断面図	38	第43図 推定地山出現標高のコンターマップ	80
第19図 後円部東西1・2トレンチ平面図・ 土層断面図	40	第44図 土層堆積状況と比較検討する比抵抗断面 位置図	80
第20図 後円部東西3・6トレンチ平面図・ 土層断面図	42	第45図 比抵抗断面（A～A'断面）と墓坑STO01 断面図（第16図）	81
第21図 後円部東西4・5トレンチ平面図・ 土層断面図	44	第46図 比抵抗断面（B～B'断面）と後円部東西 3・6トレンチ断面図（第20図）	81
第22図 くびれ部1トレンチおよび前方部東西 2トレンチ（東壁）平面図・土層断面図	46	第47図 比抵抗平面分布図（標高36.0m）	81
第23図 くびれ部2トレンチ平面図・土層断面図	47	第48図 比抵抗平面分布図（標高36.2m）	81
第24図 前方部南北2トレンチ平面図・ 土層断面図	48	第49図 電気探査実施前の現地確認状況（上）と 電気探査実施状況（下）	82
第25図 前方部東西1・2トレンチおよび前方部 南北1～2トレンチ平面図・土層断面図	50	第50図 分析対象地区（上）と土層堆積状況（第19図） からみた盛土・埋土の区分（下）	84
		第51図 地山礫における光沢礫（左）とその他の 礫（右）	84
		第52図 水洗篩別（左）と肉眼観察による内容物の 分類（右）	85
		第53図 出雲平野周辺の弥生墳丘墓および古墳の 分布と変遷	90
		第54図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘上の出土土器	93
		第55図 西谷3号墓の墳丘上の出土土器	95
		第56図 神原神社古墳の墳丘上の出土土器	96

第 57 図 松本 1 号墳の墳丘上の出土土器	96	第 59 図 北光寺古墳（左）および神庭岩船山古墳（右）	
第 58 図 大寺 1 号墳（左）および山地古墳（右）の 墳丘上の出土土器	98	の墳丘上の出土土器	99
		第 60 図 遷田 1 号墳の墳丘上の出土土器	102

挿表目次

第 1 表 一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う 発掘調査の成果および報告書一覧	3	第 9 表 常楽寺柿木田 1 号墳の構築と埋葬・葬送 儀礼	70
第 2 表 歴史的環境の参考文献一覧	21 ~ 23	第 10 表 墳丘盛土および理土の重量と内容物の含有 比率（地区別）	86
第 3 表 既往調査成果のまとめ	28	第 11 表 墳丘盛土および理土の重量と内容物の含有 比率（種類別）	86
第 4 表 土層観察表（2019 年度発掘調査）	54 ~ 58	第 12 表 出雲平野周辺の弥生時代後期後葉から古墳 時代前半期の弥生墳丘墓と古墳および墳丘 出土土器一覧	100
第 5 表 1・2 レンチ土層観察表（2020 年度試掘 確認調査）	63		
第 6 表 常楽寺柿木田 1 号墳出土土器観察表	63		
第 7 表 常楽寺柿木田 1 号墳出土石器観察表	63		
第 8 表 常楽寺柿木田 1 号墳調査成果一覧	64		

図版目次

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 図版 1 古墳遠景（1） | 図版 16 主体部の墓坑（7） |
| 図版 2 古墳遠景（2） | 図版 17 主体部の墓坑（8） |
| 図版 3 古墳遠景（3） | 図版 18 墳丘の外表施設（1） |
| 図版 4 古墳周辺全体図（1） | 図版 19 墳丘の外表施設（2） |
| 図版 5 古墳周辺全体図（2） | 図版 20 後円部の調査（1） |
| 図版 6 丘陵全体図（1） | 図版 21 後円部の調査（2） |
| 図版 7 丘陵全体図（2） | 図版 22 後円部の調査（3） |
| 図版 8 完掘状況全体図（1） | 図版 23 くびれ部の調査 |
| 図版 9 完掘状況全体図（2） | 図版 24 前方部の調査（1） |
| 図版 10 主体部の墓坑（1） | 図版 25 前方部の調査（2） |
| 図版 11 主体部の墓坑（2） | 図版 26 前方部の調査（3） |
| 図版 12 主体部の墓坑（3） | 図版 27 前方部の調査（4） |
| 図版 13 主体部の墓坑（4） | 図版 28 試掘確認調査（2020 年度） |
| 図版 14 主体部の墓坑（5） | 図版 29 出土遺物（1） |
| 図版 15 主体部の墓坑（6） | 図版 30 出土遺物（2） |

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書は一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴い、事業予定地内に所在する常楽寺柿木田古墳群において実施した発掘調査の報告書である。一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事は、2005（平成17）年度に国土交通省中国地方整備局松江国道事務所（以下、国土交通省）が出雲仁摩線として都市計画を決定して具体的に事業化され、2008（平成20）年度から本格的に進められている。事業に伴う発掘調査は、国土交通省から委託を受けて2014（平成26）年度から島根県教育委員会と出雲市文化財課が実施している（第1図・第1表）。

1 常楽寺柿木田古墳群の発見

常楽寺柿木田古墳群は島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、南から神西湖に注ぐ常楽寺川と奥ノ谷川が合流する地点の東岸の丘陵上に立地する（第2図）。丘陵の南側が事業予定地内にあたり、2010（平成22）年度から2020（令和2）年度にかけて島根県教育委員会と出雲市文化財課が試掘確認調査および発掘調査を行っているが（第3図）、古墳群の存在はそれ以前から確認されていた。

常楽寺柿木田古墳群は標高約37mの丘陵頂部に築かれる1号墳と、その北側に位置するとされる2号墳の2基の古墳からなり、1998（平成10）年度および1999（平成11）年度に当時の湖陵町教育委員会が行った分布調査のなかで見つかった。常楽寺柿木田1号墳に関しては、1999年度に測量調査が実施され、後世の墓地造営などによって丘陵南側が削平されて前方部の状況が不明瞭ではあるものの、全長30mを測る湖陵町内で唯一の前方後円墳であった可能性が指摘されている（野坂編2000）。また2号墳は、分布調査によって一辺約11mの方墳であったと推測されている。

2 道路事業の計画と既往の調査

2005年度に国土交通省によって都市計画の決定がなされるまでに、事業予定地内における重要遺跡や埋蔵文化財の有無の確認が進められた。そのなかで、計画ルート上に中世の山城で尼子十旗の一つに数えられる神西城跡が重なることが判明し、国土交通省と島根県教育委員会との協議のなかで、トンネル工法に変更して神西城跡を保存することになった。

2009（平成21）年度には出雲市文化財課の協力のもと、島根県教育委員会によって分布調査が行われ、試掘確認調査や発掘調査が必要な場所が認められた。この分布調査において、常楽寺柿木田1号墳の一部が事業予定地に隣接する可能性が判明し、2010（平成22）年度に国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課で取り扱いに係る協議が行われた。また同時に島根県教育委員会が古墳の規模や墳形、時期などの把握のために、5箇所のトレンチによる試掘確認調査（2010年度島根県試掘確認調査）を実施した。この試掘確認調査の成果によって、常楽寺柿木田1号墳は西側くびれ部



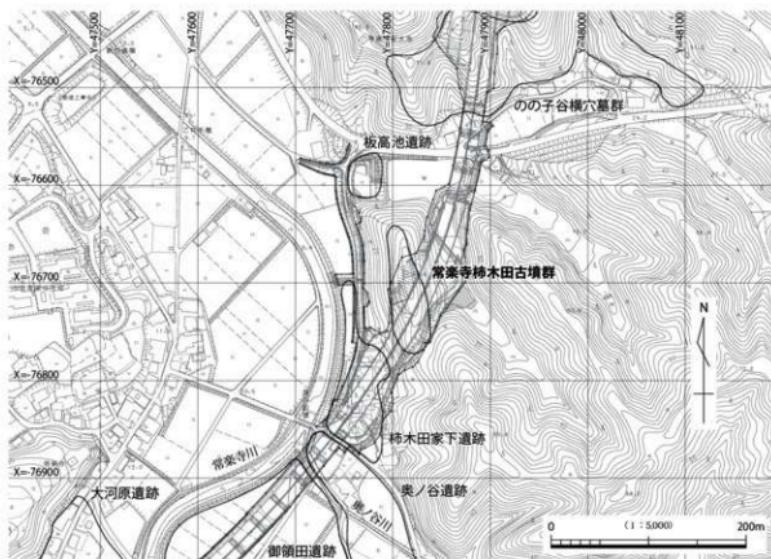
第1図 一般国道9号（出雲湖陸道路）改築工事に係る遺跡位置図

の存在など前方後円墳と判断される要素を持ち、また出土した上師器甕から築造時期が古墳時代前期頃となる可能性が考えられ、湖陵町内では最大かつ最古級の古墳である蓋然性が高まった。この成果をもとに国土交通省と古墳の保存に係る協議が実施され、暫定2車線道路では古墳の全体を回避するよう設計が変更されている。

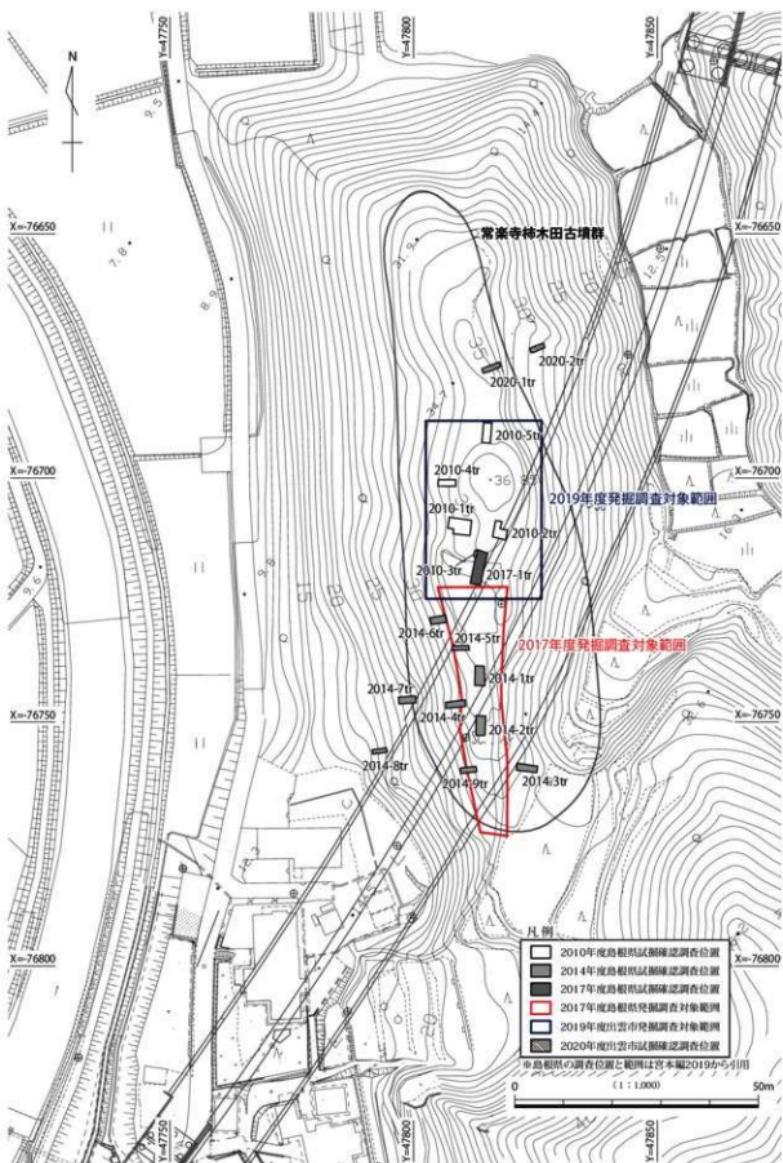
常楽寺柿木田1号墳から南に延びる丘陵上を含めた範囲までが常楽寺柿木田古墳群の周知の埋蔵文化財公載地となっており、その範囲については事業予定地と重なるため、2014（平成26）年度に島根県教育委員会が9箇所のトレンチを設定して試掘確認調査（2014年度島根県試掘確認調査）を行った。その結果、弥生時代の遺物や同時代の可能性のある遺構が確認されたため、2017（平成29）年度に丘陵南側の範囲の全面的な発掘調査を島根県教育委員会が実施した。調査のなかでは弥生時代後期半の竪穴建物跡2棟と時期が不明な溝状遺構が2条確認されており、丘陵上に弥生時代の小規模な高地性集落が展開していたことが明らかになった（宮本編2019）。また、その調査のなかで常楽寺柿木

第1表 一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う発掘調査の成果および報告書一覧

遺跡名	主な遺跡	主な遺物	備考	報告書		
				書名	出版・シリヤ次回	発行機関
御所野遺跡	古墳時代後期後葉の楕円形墳跡群、土塁	生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、瓦製品	古墳時代後期後葉の集落跡 (通り抜け発見)	「御所野遺跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	鳥取教育委員会
玉乃吉遺跡(尾・尾・尾区)	古墳時代後期後葉の壁の建築跡、廻工跡	生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、瓦片	古墳時代後期の集落跡	「玉乃吉遺跡(尾・尾・尾区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥取教育委員会
丸屋川遺跡(VIC)	古墳時代後期後葉の廻工跡、漢/古代以前の石垣跡、石柱/古墳の石垣	生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、瓦製品	古墳時代後期の集落跡 古墳時代後期の石垣跡	「玉泉寺遺跡(尾・尾・尾)丸屋川遺跡(VIC)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	鳥取教育委員会
中上立遺跡	古墳時代後期・古墳時代後期の工路/小径の土壘、石柱/壁(?)、廻工跡/石垣	生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、瓦製品、廻工跡の石垣跡	古墳時代後期から古墳時代後葉の小径や廻工跡/中世の石垣跡	「田原遺跡2区・中上立遺跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4	鳥取教育委員会
御手道跡(1~4区)	漢/古代後期後葉の土壘、廻工跡/古代の土壘、中世の廻工跡/石垣、土器群、瓦製品	廻工跡、生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、石器、石製品、瓦製品	古墳時代後期の集落跡 中世の廻工跡(?)と 神奈川周辺の石垣跡	「御手道跡(1~4区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5	鳥取教育委員会
御手道跡(5区)	古墳時代中期後葉の漢/古代・中世の廻工跡	廻工跡、生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、石器、石製品	古墳時代中期後葉の集落跡 中世の廻工跡(?)と 神奈川周辺の石垣跡	「御手道跡(5区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6	鳥取教育委員会
板木古道跡	古代末~中世の廻工跡/石垣跡、廻工跡、土壘	土塁跡、瓦器群、石器、石製品、瓦製品	中世の廻工跡(石垣跡) と神奈川周辺の石垣跡	「板木古道跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7	鳥取教育委員会
の子谷横穴墓群	古墳時代後期後葉の横穴墓	土塁跡、瓦器群、石器、瓦製品	廻工跡6号を含む (出でて廻工跡が存在)	「の子谷横穴墓群 (出でて廻工跡が存在)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書8	鳥取教育委員会
常楽寺柿木田古墳群(後醍醐天皇)	古墳時代後期後葉の壁の建築跡	生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、瓦製品	古墳時代後期後葉の集落跡 瓦器群の古墳跡 「後醍醐天皇の集落跡」	「常楽寺柿木田古墳群 (後醍醐天皇)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書9	鳥取教育委員会
常楽寺柿木田古墳群(近江天皇)	古墳時代前期~中期の前方後円墳	土塁跡、瓦器群、陶器群、石器、石製品	古墳の傾斜・廻工跡 「常楽寺柿木田古墳群 (近江天皇)」と近江天皇の埴跡	「常楽寺柿木田古墳群 (近江天皇)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書10	鳥取教育委員会
御田遺跡(1区)	古墳時代~古代の廻工跡/廻工跡	土塁跡、瓦器群、陶器群、土器群、瓦製品	古墳時代~古代の廻工跡 「御田遺跡(1区)」	「御田遺跡(1区)」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11	鳥取教育委員会
御田遺跡(2区)	漢/古代中期後葉の石垣/廻工跡/中世の石垣	廻工跡、生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、石器、石製品	漢/古代中期後葉の廻工跡 の跡地	「御田遺跡2区・中上立遺跡」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12	鳥取教育委員会
御田遺跡(3区)	漢/古代後期中期の廻工跡/土壘、土柱/柱穴	廻工跡、生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、石器、石製品	漢/古代後期中期の廻工跡 の跡地	「御田遺跡3区」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書13	鳥取教育委員会
御田遺跡(4区)	漢/古代後期中期の壁の建築跡/配石土柱/土壘、集石遺跡、廻工跡	廻工跡、生土壇、土塁跡、瓦器群、土器群、陶器群、瓦製品	漢/古代後期中期の廻工跡 と基礎(方形土器の土壘)	「御田遺跡4区」	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書14	鳥取教育委員会



第2図 常楽寺柿木田古墳群の位置と範囲



第3図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査位置および発掘調査対象範囲

田1号墳の前方部先端の確認を目的とした1箇所のトレンチによる試掘確認調査（2017年度島根県試掘確認調査）が行われたが、埴丘端部を示す情報は得られていない。

3 今回の調査と法的手続き

当面は暫定2車線道路で整備する計画であったが、将来的な完成4車線道路供用を見据えての事業計画の具体化に伴い、暫定2車線道路の整備時に合わせて完成4車線道路供用に伴う法面工事を実施するなどの工法の具体化や工期の変更などが計画された。これまでの調査成果を反映して島根県教育委員会が作成した常楽寺柿木田1号墳の想定範囲を国土交通省が現地に表示した。また完成4車線道路の整備に伴う法面工事が古墳に影響する範囲について、2018（平成30）年度に国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課が現地確認を行い、想定される1号墳の前方部の南側と東半分および後円部の東側の一部が範囲に含まれることが明確に示されたため、2019（平成31・令和元）年度に1号墳の発掘調査を実施する必要性が確認された。島根県教育委員会と出雲市文化財課との協議の結果、出雲市文化財課が島根県教育委員会の全面的な協力を得て発掘調査を実施することになった。

常楽寺柿木田1号墳に係る文化財保護法上の手続きは、2019年7月1日付け国中整松工第101号にて文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長宛てに提出され、これまでの試掘確認調査の結果や協議内容を受けて島根県教育委員会が2019年7月1日付け島教文財第69号の72で発掘調査の実施を勧告した。2019年7月3日に国土交通省から出雲市文化財課が発掘調査の委託を受け、2019年8月16日付け文財第364号にて出雲市教育委員会から島根県教育委員会教育長宛てに文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知が提出された。調査終了後の遺跡の取り扱いについては、工事で影響を受ける範囲は記録保存に留めることとなり、その内容について国土交通省中国地方整備局松江国道事務所所長宛てに2020（令和2）年2月20日付け文財第876号にて通知し、2020年3月31日付け文財第997号にて松江国道事務所所長宛てに完了報告を提出了。

常楽寺柿木田1号墳の北側における丘陵東側斜面に国土交通省が管理道を設営する計画であり、一部が常楽寺柿木田古墳群の包蔵地に該当するため、試掘確認調査を実施して遺構などの有無を確認する必要があった。国土交通省から2020年6月8日付け国中整松工第15号にて事前調査依頼が提出され、2020年7月3日付け文財第232号にて出雲市教育委員会から島根県教育委員会教育長宛てに文化財保護法第99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知が提出された。その後に出雲市文化財課が2箇所のトレンチを設けて試掘確認調査を実施した（2020年度出雲市試掘確認調査）。調査結果については、松江国道事務所所長宛てに2020年7月21日付け文財第296号にて報告した。その後、2020年8月7日付け国中整松工第23号にて文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が、国土交通省から島根県教育委員会教育長宛てに提出された。試掘確認調査の結果および協議内容を受けて、島根県教育委員会が2020年8月25日付け島教文財第13号の52で埋蔵文化財包蔵地における土木工事について、埋蔵文化財に影響を与えないように慎重に工事を行うことを勧告した。

第2節 調査の経過

1 2019年度の調査

(1) 発掘調査の方針

国土交通省の事業計画では、完成4車線道路の整備に伴いアンカー工法による法面工事が検討されており、常楽寺柿木田1号墳の前方部の南側と東半分および後円部の東側の一部が工事範囲に含まれる可能性があったが、詳細な工法内容は確定しておらず、発掘調査などの結果をもとに具体的に検討する方針であった。そのため、発掘調査では古墳の墳丘構造を可能な限り正確に把握して、葺石など墳丘の外表施設の有無を確認し、さらに主体部の有無や主体部が残存していた場合における規模・範囲・深さを明確にする必要があった。2019(平成31)年4月11日に国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課で調査内容を協議するなかで、現在想定されている墳丘範囲の東側を全面的に発掘調査し、西側は墳丘端部を正確に把握するために必要な範囲で部分的に調査を実施することとなった。また、主体部が残存する可能性のある後円部について、発掘調査と並行して法面工事の設計に着手する必要があったため、電気探査による解析によって予め主体部の位置や規模および深さのほか、後円部の地山の深さが推定できる情報を取得して発掘調査を行うこととした。

(2) 電気探査と事前準備

発掘調査に先立って、7月10日から後円部の電気探査を実施した。電気探査では、後円部上の10m×10mの範囲を0.5mメッシュで区画し、測線と測点を設定している(第4章)。7月12日からは電気探査の測点位置を正確に把握するために写真測量を行った。また7月30日から島根県が実施した試掘確認調査(2010年・2017年度島根県試掘確認調査)の位置を復元した。8月9日には発掘調査前の古墳の現状を記録するために3次元レーザー測量を実施し、8月29日から8月31日にかけて現場事務所や発掘調査用具などの資材の搬入を行い、発掘調査の準備を進めた。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は2019(令和元)年9月2日から2020(令和2)年2月7日まで実施した(第4図)。9月3日にはドローンによる発掘調査前の現地の空中撮影を実施した。また同日から丘陵上の腐葉土の掘削を開始し、9月9日からは調査範囲の表土掘削を進めた。電気探査の成果は第4章で詳しく報告されているが、地山面の推定の高さに対して、後円部の西側斜面に帯状の窪み、頂部付近に長方形の窪みが確認された。このうち、長方形の窪みは主体部の墓坑の掘り込みである可能性が考えられ、後円部の頂部付近ではその範囲を中心に表土の掘削を慎重に進めた。

後円部で9箇所のトレーナー、前方部では5箇所のトレーナーを設けて墳丘端部の確定や墳丘の構築過程を検討しながら9月上旬から掘削を進めた。なお、くびれ部の状況を正確に把握するため、2010年島根県試掘確認調査1・2トレーナーを再度掘削している。電気探査で示された後円部西側斜面の帯状の窪みは、浸食や斜面変動跡などの可能性が想定されたため、墳丘端部の確認とともに、土層堆積状況についても詳しく検討した。



第4図 発掘調査状況



第5図 現地説明会状況



第6図 現地調査指導状況

墳丘範囲の東側は、各トレーニングの土層堆積状況を確認しながら当時の墳丘面を検討しつつ、後円部の東側ではトレーニング間に調査区を設けて9月下旬から段階的に全面的な掘り下げを行った。また前方部の東側は、後円部東側の全面的な掘削完了の見通しが立った12月上旬から各トレーニングを拡張して全面的に掘り下げた。

主体部の存在が想定された後円部上には表土下に盛土が認められ、その下に布志名層の地山を確認した。9月下旬から後円部東側の全面的な掘削とともに、後円部上の主体部を確認する掘削も本格的に開始し、10月から11月にかけて慎重に盛土を掘り下げた。後円部上の盛土の掘削が概ね終了し、12月中旬から下旬に電気探査で確認した長方形の窪みの位置をもとに地山上面の精査を行ったところ、3箇所の地山の掘り込みが確認された。これらは主体部の墓坑と考えられ、後円部上に3基の墓坑が存在することが判明した。今回は主体部の規模・範囲・深さの把握が目的であり、主体部内部の詳細な調査は行っていないため、埋葬施設や副葬品などの状況は不明である。また、調査のなかでは明確な乱掘穴などは見当たらなかった。主体部周辺を覆う盛土については、盛土の性格を把握するために内容物の精査⁽¹⁾を行い、同時に遺物の有無などを確認することとした⁽²⁾。その成果は第5章第1節で報告する。その他、後円部北側の墳丘面では一定の範囲に展開する礫敷が見つかり、前方部の南側では後世の墓地造成に伴うとみられる土坑を14基、時期不明の溝状構造を1条確認した。

こうした調査成果を地元に広く周知するため、地元向けの現地説明会を12月14日に開催し、30名の参加を得た（第5図）。

1月上旬から中旬に遺構面の精査や記録作業を進め、1月21日には完掘状況の空中撮影および写真測量を行い、1月22日に3次元レーザー測量を実施した。また1月22日からは記録作業が完了した場所から人力による埋め戻しを行い、1月29日から重機による埋め戻しも実施した。並行して現場の片付け、資材の撤去などを行い、2月7日に発掘調査の現場作業が終了した。

（4）調査指導の概要

調査を進めるなかで、多くの方々から調査方針や主体部などの遺構の評価、および今後の保存や整備の方向性などについての指導や助言を受けた（第6図）。

9月30日には島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの角田徳幸氏、深田浩氏、岩崎孝平氏から調査方針や地山の状況などについて助言をいただいた。

10月9日に島根県教育庁文化財課の仁木聰氏から電気探査の成果を踏まえた主体部調査の方向性を中心にご教示いただいた。また10月28日には島根県教育庁文化財課の池淵俊一氏と仁木聰氏から、主体部の調査方針のほか、これまでに島根県教育委員会が実施した試掘確認調査の成果を含めた古墳の評価について指導を受けた。

11月11日に島根県立八雲立つ風土記の丘の松本岩雄氏および島根考古学会会員の曳野律夫氏、そして11月15日には島根大学法文学部の岩本崇氏と仁木聰氏から専門的見地による古墳の墳丘端部を示す土層の堆積状況や、古墳規模とその評価についてご教示をいただき、また主体部の調査方法などについても指導を受けた。地山の地質的な特徴や後円部上に広がる礫群の石材同定などについては、11月29日に島根県立三瓶自然館の中村唯史氏から調査指導を受けた。

12月3日には角田徳幸氏、12月11日には出雲市文化財保護審議会委員の西尾克己氏から主体部の墓坑などの遺構の評価や、今後の保存や整備の方向性について指導をいただいた。

その後、主体部やその他の遺構を確認しながら土層の堆積状況を中心に検討を進めて墳丘規模を把握し、調査終了間近となる1月17日に仁木聰氏の調査指導を受け、遺跡の取り扱いの協議を行った。

(5) 古墳の取り扱い方針

調査終了後の2月20日には、これまでの調査成果や調査指導の内容を踏まえて確定した主体部の範囲および墳丘規模と範囲をもとに、国土交通省と島根県教育委員会および出雲市文化財課で工事内容と古墳への影響などについて協議を行った。また、そのなかで墳丘の東側については完成4車線供用に伴う法面工事などで削平が必要な部分以外に影響が生じないように工法内容を検討して設計することを確認した。

2 2020年度の調査

完成4車線供用に伴う法面工事など一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事によって削平される前の詳細な地形の記録を行うため、2020年5月に古墳が立地する丘陵を含めた周辺地形の航空レーザー測量を実施し、7月には古墳周辺の3次元レーザー測量を実施した。また、これまでの3次元レーザー測量の計測データをもとに、赤色立体地図を作成した。

常楽寺柿木田1号墳の北側における丘陵東側斜面には、国土交通省が管理道を設置する計画を進めしており、その一部が常楽寺柿木田古墳群の包蔵地に該当する。常楽寺柿木田1号墳の北側には、1998（平成10）年度と1999（平成11）年度に行われた湖陵町教育委員会の分布調査によって常楽寺柿木田2号墳の存在が想定されており、これらに関連した遺構が存在する可能性が考えられたため、7月14日から20日にかけて試掘確認調査を実施した（第7図）。2箇所のトレンチを設けて調査を行ったが、遺構や遺物は確認されなかった。また10月14日には、愛媛大学名誉教授の下條信行氏が現地観察に来られ、常楽寺柿木田1号墳の評価について有益な助言をいただいた。

3 整理作業

発掘調査で出土した遺物の水洗や注記、接合作業などの整理作業は、調査と並行して出雲弥生の森博物館にて実施し、2020年4月からは遺物の図化作業とともに、主体部周辺を覆っていた後円部上の盛土などを対象にした水洗篩別の作業についても本格的に開始した（第8図）。詳細は第5章第1節にて報告するが、盛土内における遺物の有無や盛土の性格を明確にする目的で実施したもので、選別には2mmメッシュの篩を用いて内容物を確認した。また、7月6日には出土した石器の石材や盛土などの内容物について中村唯史氏から調査指導を受けた。10月1日には島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが所蔵する常楽寺柿木田古墳群の出土品の資料調査を行い、2010年度の試掘確認調査で出土した土器（土師器）を1点借用した⁽³⁾。なお資料借用については、2020年9月29日付け島教埋第305号にて許可を得た。その後、遺物の整理や記録作業、写真撮影などを行った。

註

- (1) 後円部上の盛土は、後円部を掘削するなかで土のう袋に入れて取り分けており、大部分は2020年度に出雲弥生の森博物館にて水洗篩別を実施したが、一部は10月中旬から1月下旬までの間に現地で篩別を行った。
- (2) 盛土内から主体部の副葬品や後世の遺物が出土した場合は、乱掘を含めた後世の改変や削平を受けた可能性が考えられる。
- (3) 資料調査および資料借用にあたっては、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの守岡正司氏、伊藤智氏にお世話になった。

参考文献

野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡地図』湖陵町教育委員会

宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 烏根県教育委員会



第7図 2020年度試掘確認調査状況



第8図 水洗篩別状況

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

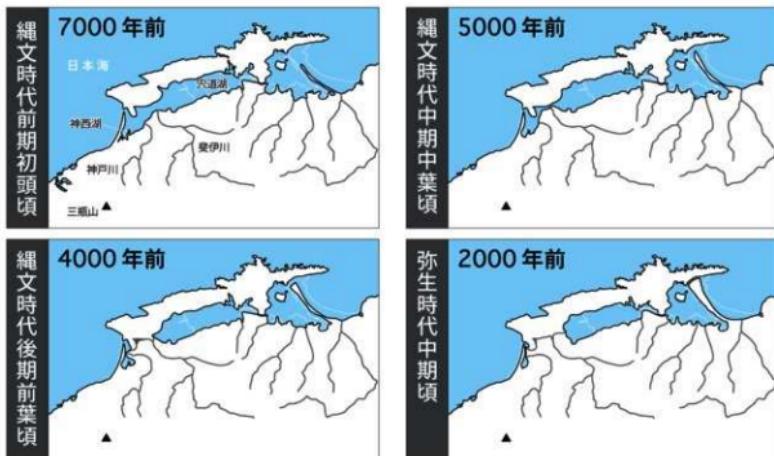
常楽寺柿木田古墳群は島根県出雲市湖陵町常楽寺に所在し、南から神西湖に注ぐ常楽寺川と奥ノ谷川が合流する地点の東岸の丘陵上に位置する。神西湖は出雲平野の西部にある潟湖で、奈良時代の733年に奏上された『出雲國風土記』に「神門水海」として記された広大な水域が、河川による堆積作用や気候変動に伴う環境変化、差海川の開削などの人工的な改変の影響を受けて多様な変遷をたどり、現在の神西湖の原形となった。ここでは、常楽寺柿木田古墳群が所在する湖陵町周辺の地理的環境について、出雲平野や神西湖の変遷を踏まえてまとめる。

中国地方山陰側は、新生代の古第三紀頃（6,000万年～4,000万年前頃）、日本海が形成される以前は大陸の一部であった。この頃、花崗岩マグマの発生によって生成・噴出した花崗岩や流紋岩・デイサイトが地盤となっている。その後、新第三紀中新世の初期（2,500万年前頃）から始まる大陸からの分離と日本海形成のなかで、激しい火山活動が発生し、それに起因する堆積岩類や火山岩類がその上を覆うようになった。湖陵町周辺もその影響を大きく受けしており、南部の山地や丘陵地はこの時代に形成された安山岩や火山碎屑岩、礫岩などの波多累層や大森累層で構成され、北部の低地部は砂岩や泥岩系の布志名累層からなる（三浦 2000）。

第四紀の更新世（約250万年～1万年前）には氷期と間氷期を繰り返し、湖陵町の海岸沿いなどには海水面の上昇に伴う礫層や、風成作用による砂丘堆積物がみられる。最終氷期（ヴュルム氷期）の最寒冷期（2万年～1万6千年前頃）になると、100m以上に及ぶ海面低下によって大幅な海退現象が生じ、島根半島と隠岐諸島が陸続きになったと考えられている（中村 2009・2014）。

完新世（約1万年前以降）になると最終氷期の終焉とともに気候が急速に温暖化し、それに伴って海進が進んだ。海進は7,000年から6,000年前頃の縄文時代に極大に達する。いわゆる「縄文海進」である。島根半島でも出雲平野から現在の宍道湖周辺にかけて内湾（古宍道湖）が形成され、現在の神西湖と周辺の低地部はその一部であった。海面が最高潮に達した後は次第に低下し、斐伊川や神戸川など河川の河口部で三角州の形成が進んで徐々に沖積平野が広がる。これは島根半島が日本海の波浪と沿岸流を遮ったことにより、三角州の発達が促されたという地形的特質が大きい（中村 2009）。

このような出雲平野の発達に最も大きく影響したのは三瓶山の火山活動であった。三瓶山は縄文時代に3回噴火しており、縄文時代草創期から早期における1回目の噴火（約1万2千年から1万年前頃）は大きな影響を与えたなかったが、それ以後に起きた2回の火山活動によって三瓶山の麓にある神戸川に多量の火碎物が流れ込み、洪水となって下流に膨大な量の土砂をもたらした。その土砂が扇状地を急激に発達させて三角州が肥大し、現在の出雲平野の原形を生み出したと考えられる（中村 2006a・2006b）。その2回の噴火時期は年代測定の結果から、縄文時代の前期後葉頃（約5,500年前）と後期前葉頃（約4,000年前）に比定できる（小林・角田 2006）。この三瓶山の火山活動により出雲平野は急



第9図 島根半島と出雲平野の古地形変遷（中村 2014 に加筆）

速に発達した(第9図)。これ以降は斐伊川・神戸川における三角州の発達などの影響で内湾環境であった水域に出雲平野の形成が進み、東側は現在の宍道湖、西側には神西湖の原形となる水域が形成されていく(林 1991)。また、両水域は火山活動による洪水堆積物に関連して海との連絡口が閉鎖され、この時期(約4000年前)以降に淡水環境に移行したことが分かっている(山田ほか 2004, 山田・高安 2006a・2006b・2007, 中村・野坂 2006, 濑戸ほか 2012, 濑戸・岡崎 2013)。

それ以降も三角州が発達して出雲平野が拡大するなかで人々の生活は盛んになっていった。湖陵町周辺でも縄文時代晚期から弥生時代以降に遺跡が多く確認されるようになる。この頃(約2000年前)には神西湖の原形となる水域は海とつながり、汽水環境が続く(山田ほか 2004, 山田・高安 2006a・2006b・2007, 濑戸・岡崎 2013)。奈良時代の『出雲国風土記』には「神門水海」として登場し、生息する魚類などの記述から汽水環境であった当時の様子が読み取れる。

神戸川の堆積作用に伴う潮流口の閉鎖によって約1000年前に再び淡水環境となる。中世から近世にかけては出雲地方の山間部でたらら製鉄が盛んになり、砂鉄採取のための鉄穴流しが各地で行われた。鉄穴流しへは多量の土砂が伴い、それが斐伊川や神戸川に流れ込んで下流まで運ばれ、出雲平野の地形発達に影響を与えた(林 1989)。また同時に河川の氾濫や周辺の冠水状態を引き起こしていたが、神西湖では差海川が1686(貞享3)年に人工的に開削され(野津 1930, 池橋 2000), その結果として海とつながって汽水環境に戻り(瀬戸・岡崎 2013, 川上 2019), 神戸川の埋積作用によって水域が縮小して約300年前まではほぼ現在の神西湖の形となった(大西ほか 1990, 石原ほか 2000)。

参考文献

池橋達雄 2000 「差海川の開削」『湖陵町誌』湖陵町 466～493頁

石原廣和・亀井健史・中村唯史 2000 「CNS元素分析による出雲平野神西湖周辺の完新世堆積物の堆積環境評価

- とその地盤工学への応用』『応用地質』第41巻第1号 日本応用地質学会 12~23頁
- 大西郁夫・徳岡隆夫・高安克己・石原 清・梶田秀児・日下智博・熊井克己 1990 「出雲平野西部の自然史」『山陰地域研究』第6号 島根大学山陰地域研究総合センター 21~34頁
- 川上 稔 2019 「神西湖の形成」『神西湖誌』神西自治協会 9~17頁
- 小林謙一・角田徳幸 2006 「三瓶火山の噴出物と縄文時代のAMS炭素14年代測定」『島根考古学会誌』第23集 島根考古学会 43~55頁
- 瀬戸浩二・岡崎裕子・酒井哲弥・高田裕行・山田和芳・渡辺正巳 2012 「出雲平野南西部の形成過程—神戸川河口域の古環境変遷史—」『出雲国風土記の研究IV 神門水海南辺の研究(資料編)』島根県古代文化センター 調査研究報告書46 島根県古代文化センター 45~59頁
- 瀬戸浩二・岡崎裕子 2013 「神門水海の古地理の復元に向けて」『出雲国風土記の研究IV 神門水海南辺の研究(論考編)』島根県古代文化センター調査研究報告書47 島根県古代文化センター 3~14頁
- 中村唯史 2006a 「神戸川デルタの地形発達」『島根県立三瓶自然館研究報告』第4号 島根県立三瓶自然館 25~29頁
- 中村唯史 2006b 「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』第45巻第5号 日本国第四紀学会 407~420頁
- 中村唯史 2009 「塩治の自然環境」『出雲塩治誌』出雲塩治誌刊行委員会 3~39頁
- 中村唯史 2014 「縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター 研究論集第13集 島根県古代文化センター 87~92頁
- 中村唯史・野坂俊之 2006 「神西湖西岸低地の完新世環境変遷」『島根県立三瓶自然館研究報告』第4号 島根県立三瓶自然館 17~23頁
- 野津左馬之助 1930 「神西湖の排水」『島根県史』第9巻 島根県 299~300頁
- 林 正久 1989 「斐伊川流域における鉄穴流しと出雲平野の形成」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究 一斐伊川下流域を中心として』島根大学山陰地域研究総合センター 17~44頁
- 林 正久 1991 「出雲平野の地形発達」『地理学評論 Ser.A』Vol.64 日本地理学会 26~46頁
- 三浦 清 2000 「湖陵町の地学的自然」『湖陵町誌』湖陵町 1~58頁
- 山田和芳・高田裕行・高安克己 2004 「島根県神西湖堆積物の層序と完新世環境変遷史」『LAGUNA(汽水域研究)』No.11 島根大学汽水域研究センター 135~145頁
- 山田和芳・高安克己 2006a 「『神門水海』の湖岸線復元—地形・地質コアによる検討—」『出雲国風土記の研究III 神門水海北辺の研究(資料編)』島根県古代文化センター調査研究報告書34 島根県古代文化センター 41~52頁
- 山田和芳・高安克己 2006b 「出雲平野一宍道湖地域における完新世の古環境変動—ボーリングコア解析による検討—」『第四紀研究』第45巻第5号 日本国第四紀学会 391~405頁
- 山田和芳・高安克己 2007 「地質コア解析に基づいた出雲平野の形成史」『出雲国風土記の研究III 神門水海北辺の研究(論考編)』島根県古代文化センター調査研究報告書38 島根県古代文化センター 1~13頁

第2節 歴史的環境

ここでは、常楽寺柿木田古墳群が所在する湖陵町周辺を含む出雲平野の西部域（斐伊川以西）の歴史的環境について遺跡分布や範囲（第10～12図）をもとに概観し、古墳群の通史的な位置づけについて、前節で確認した地理的環境の変遷を踏まえて検討したい。なお、本文中の番号は第10図の遺跡番号に対応する。

旧石器・縄文時代

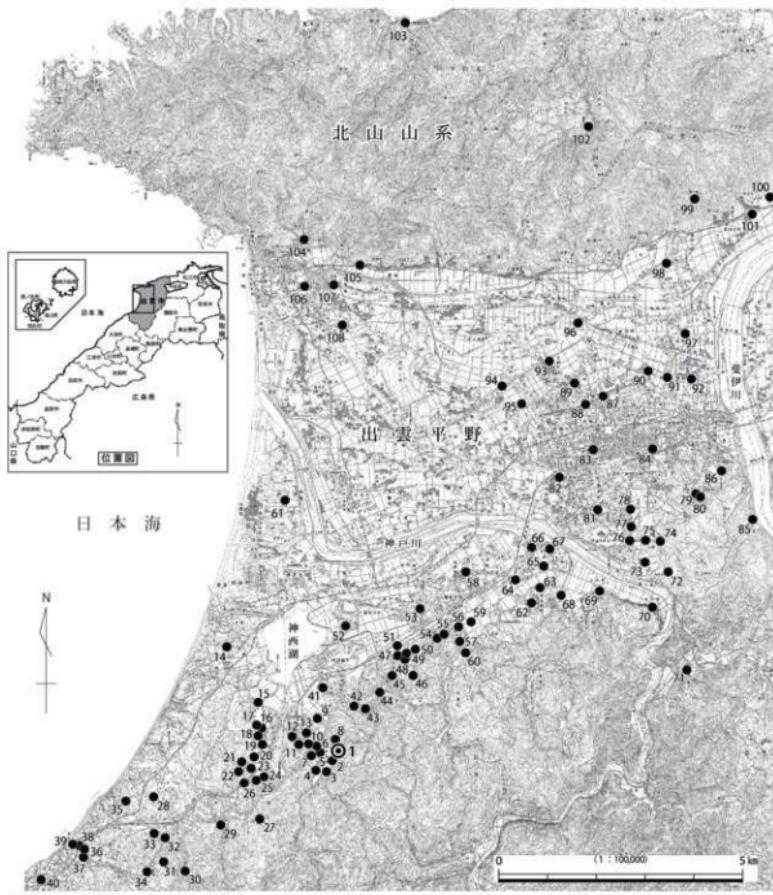
旧石器時代の遺跡は湖陵町内では確認されていないが、隣接する多伎町内の日本海沿岸付近にある砂原遺跡（多伎町、39）で石器の発見が報告されている（松藤編2013）。近接する砂原I遺跡（多伎町、36）では、約5万年前の三瓶火山から噴出した三瓶雲南テフラと三瓶池田テフラの可能性がある火山灰層、そして約3万年前から2万8千年前の南九州の姶良カルデラに由来する姶良Tn火山灰層が確認された（今岡・勝部編2010）。

出雲平野の縄文時代遺跡のなかで現在確認できる最も古い土器が出土したのは、島根半島の北山東南麓に位置する山持遺跡（西林木町、98）であり、早期の押型文土器が出土している（原田編2009）。早期末頃から前期にかけては「縄文海進」で広がった広大な内湾（古宍道湖）の近くで人々の生活が確認でき、湖陵町内の板津焼山遺跡（14）のほか、菱根遺跡（大社町、105）や上長浜貝塚（西園町、61）などが知られている（同志社大学出雲考古文化調査団1959、川上・湯村編1996、石原編2013）。

中期の遺跡は総じて少なく、前半期は山持遺跡などわずかな遺跡しか知られていない。しかし、中期後半から後期初頭になると遺跡が多く確認されるようになり、三田谷I・III遺跡（上塩治町、73）や築山遺跡（上塩治町、77）で土器がまとまって出土した（今岡・梶田編1999、伊藤編2000、米田・三原編2005）。なお、後期以降は精神文化に関連した遺物が目立つようになり、三田谷I遺跡では後期初頭から前葉頃の板状土偶が確認されている（今岡・梶田編1999）。この時期には湖陵町内では奥ノ谷遺跡（2）、その周辺では麓II遺跡（東神西町、44）で比較的多くの縄文土器が出土している（野坂編1995a、勝部編2017）。

後期前葉以降の遺跡では、明確な集落跡を示す遺構が確認できるようになる。湖陵町内では御領田遺跡（3）で後期前葉の竪穴住居跡が確認され（角田・野坂編1994）、この地に集落が存在したことを具体的に示している。この頃（約4,000年前）の三瓶山の噴火によって、神戸川の下流に大量の土砂が運ばれて出雲平野が発達した。常楽寺川を挟んで御領田遺跡の対岸に位置する京田遺跡（4）では、後期中葉から後葉にかけての竪穴建物跡や配石墓のほか、土坑墓と考えられる土坑群などが確認されており、当時の集落の様相が明らかになった（守岡正編2017a、幡中編2019、深田・園山編2020）。また、東日本に由来すると考えられる異形土器が見つかっており、さらに北海道産の可能性を示す水銀朱が付着するなど、遠隔地との交流の実態を知るうえで重要な資料となる（幡中編2019）。その他近隣する上深田遺跡（26）でも同時期の土器が出土しており（西尾・野坂2000）、複数の集落が営まれていたことを示唆する。

晩期になると、三田谷I・III遺跡、山持遺跡など以前から継続的に確認できる遺跡に加え、新たな



1 常楽寺柿木田古墳群	19 姉谷惠比須遺跡	37 後谷横穴墓群	55 間谷東遺跡	73 三田谷Ⅰ・Ⅲ遺跡	91 中野美保遺跡
2 奥ノ谷道路	20 只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡	38 砂原小山横穴墓群	56 浅柄古墳	74 上塙治筒穴墓群	92 中野清水遺跡
3 卵領田道路	21 只谷Ⅲ遺跡	39 砂原遺跡	58 浅柄古墳	75 池田古墳	93 矢戸遺跡
4 京田道路	22 回屋・新花前遺跡	40 砂原古墳	58 知井吉多聞間遺跡	76 上塙治地廻山古墳	94 井原道路
5 常楽寺道路	23 姉谷城跡	41 田中谷貝塚	59 浅柄遺跡	77 篠山道路	95 白桂荒神遺跡
6 室反Ⅰ・Ⅱ遺跡	24 姉谷柿木田遺跡	42 板本谷遺跡	60 保知石遺跡	78 上塙治筒山古墳	96 高浜Ⅰ遺跡
7 安子神社横穴墓群	25 高畠道路	43 神西城跡	61 上長浜貝塚	79 菅古古墓	97 秩父古墓
8 のの子谷横穴墓群	26 上深田遺跡	44 寒川Ⅱ遺跡	62 地藏堂横穴墓群	80 長者原磨寺	98 山持道路
9 三部竹崎道路	27 妻山城跡	45 中上Ⅱ遺跡	63 妙蓮寺山古墳	81 神門寺境内麻寺	99 鹿ヶ巣城跡
10 雪部Ⅰ・Ⅱ遺跡	28 雪州久色長沢鍬除跡	46 北光寺古墳	64 宝塚古墳	82 天神遺跡	100 大寺古墳
11 雪部古墳群	29 姉谷鶴山跡	47 九景川遺跡	65 田端遺跡	83 海上遺跡	101 青木道路
12 食道古墳群	30 奇松穴跡	48 五景川寺裏遺跡	66 下古寺遺跡	84 今市大寺古墳	102 鶴洞寺
13 竹崎道路	31 久村鶴山跡採掘場	49 鶴崎谷遺跡	67 古志本郷遺跡	85 横須山古墳	103 猪目洞窟遺跡
14 桜津鹿山道路	32 久村鶴山跡採掘場	50 泷井瑞2号墳	68 放レ土古墳	86 西谷墳墓群	104 出雲大社境内遺跡
15 西安原道路	33 矢谷遺跡	51 丁之内古墳	69 井上横穴墓群	87 姫原西遺跡	105 美根遺跡
16 三部八幡下道路	34 翠庭寺	52 山地古墳	70 小坂古墳	88 蔵小路西遺跡	106 鹿島山遺跡
17 八幡宮横穴墓群	35 正南横穴墓群	53 神樂横穴墓群	71 朝山谷墓	89 小山遺跡	107 原山道路
18 保知石古遺跡	36 砂原Ⅰ遺跡	54 間谷妻古墳	72 光明町3号墓	90 中野西遺跡	108 中分貝塚

第10図 常楽寺柿木田古墳群と出雲平野周辺の主要遺跡

場所にも遺跡が認められる。三田谷I遺跡では北陸地方の影響がみられる「三田谷文様」を持つ土器が出土しており(鳥谷編2000),当時の幅広い地域間交流の姿を物語る。湖陵町内では三部竹崎遺跡(9)や三部八幡下遺跡(16),周辺地域では九景川遺跡(東神西町,47),御崎谷遺跡(東神西町,49)や保知石遺跡(芦渡町,60),浅柄遺跡(知井宮町・芦渡町,59)などで晩期の土器や石器が確認されている(角田・野坂編1994,野坂編1995b,園山編2000,川原編2005,池淵編2008,今岡編2009)。

弥生時代

弥生時代には水稻農耕を生活基盤とする社会へと徐々に移行するが,前期には鶴の圧痕が確認できる土器が見つかった矢谷遺跡(多伎町,33)や鶴の圧痕が残る土器と配石墓が確認された原山遺跡(大社町,107)など(村上ほか編1986,松尾編2004),新たな遺跡が見つかる一方で,縄文時代の晩期頃から存続する遺跡が目立つ。湖陵町内では三部竹崎遺跡や三部八幡下遺跡,縄文時代後晩期の粗製土器と弥生時代前期の土器が確認された姉谷恵比寿遺跡(19)などが知られ(杉原ほか編1987,野坂編1995b),出雲平野中央部では矢野遺跡(矢野町,93),姫原西遺跡(姫原町,87),蔵小路西遺跡(渡橋町・小山町,88)などで縄文時代晩期後半から連続的に集落が存続したと考えられる(足立編1999,間野編1999,坂本編2010)。狩猟採集を生業とした縄文時代から水稻農耕を基盤とする弥生時代へと比較的スムーズに移行した様子がうかがえよう。

中期になると湖陵町内で確認できる遺跡数が減少し,姉谷柿木田遺跡(24)などで土器が見つかっている程度である(西尾・野坂2000)。一方で,神戸川の沿岸部では古くに貝塚の存在が確認された知井宮多聞院遺跡(知井宮町,58)のほか(勝部・西尾編1980),古志本郷遺跡(古志町,67)や下古志遺跡(下古志町,66),田畠遺跡(下古志町,65),天神遺跡(天神町,82)などの環濠を持つ集落が中期中葉頃に出現し(岸編1997,松山編1998,三原編2000,米田・三原編2001),後期以降も存続する集落が多い。また,出雲平野中央部でも海上遺跡(塙治町,83)や中野清水遺跡(中野町,92),小山遺跡(小山町,89),白枝荒神遺跡(白枝町,95)などでこの時期の遺物がまとまって出土し(米田・三原編1997,藤永編2002,園山編2002,角田編2006),集落が存在していたことを示唆する。中期中葉頃には出雲平野中央部の中野美保遺跡(中野町,91)で方形貼石墓が築かれ(仁木編2004),中期後葉に青木遺跡(東林木町,101)で萌芽的な四隅突出型埴丘墓が認められるなど(今岡ほか編2006),墳墓の形成が徐々に目立つようになる。

後期には各地で人々の活動が活発になり,確認される遺跡が急増する。湖陵町内では神西湖南の平野部から谷の丘陵裾部付近において京田遺跡のほか,只谷I・II遺跡(20),西安原遺跡(15),三部八幡下遺跡,雲部I・II遺跡(10),庭反I・II遺跡(6),竹崎遺跡(13)などが確認でき,高畦遺跡(25)では竪穴住居跡が見つかっている(野坂編1995b,西尾・野坂1995・2000,勝部編2017)。湖陵町周辺においても竪穴住居跡や竪穴建物跡が確認された上長浜貝塚や玉泉寺裏遺跡(東神西町,48),貝塚が形成された田中谷貝塚(西神西町,41)が認められる(西尾・野坂1995・2000,川上・湯村編1996,人見編2017)。出雲平野中央部でもこの時期から盛行する集落が多く,井原遺跡(白枝町,94)で環濠の可能性のある溝が確認できる(岸編2002)。また白枝荒神遺跡では,包含層から銅鏡の破片やガラス製の小玉などが出土しており(須賀編2018),集落の性格を考えるうえで興味深い。こ

これら後期の集落は古墳時代以降まで存続する場合が多い。墳墓に関しては、湖陵町周辺では玉泉寺裏遺跡で終末期から古墳時代初頭の木棺墓が確認される程度である（景山・曾田編 2008）。出雲平野中央部では中野美保遺跡、青木遺跡で四隅突出型埴丘墓が造営されるほか、丘陵部にある西谷古墳群（大津町、86）では西谷3号墓に代表される国内有数の巨大な四隅突出型埴丘墓が連続的に造営され（坂本編 2006、渡邊・坂本編 2015）、王墓が連綿と継承される様子をうかがい知ることができる。

古墳時代

古墳時代になると各地で古墳が造営されるようになる。前期の古墳は、湖陵町内で常楽寺柿木田1号墳を含む常楽寺柿木田古墳群（1）が確認されている（野坂編 2000、宮本編 2019）。湖陵町周辺では2基の箱形木棺と1基の箱形石棺を備えて筒形銅器や銅鏡などが副葬された前期末頃の円墳とされる山地古墳（神西沖町、52）が著名であり（川上編 1986），それに先行する古墳も確認されている。例えば、粘土櫛と礫櫛を備える埋葬施設が確認された浅柄II古墳（浅柄II遺跡）（知井宮町、57）や埋葬施設に土器棺2基を持つ浅柄北古墳（知井宮町、56）が挙げられ（川原編 2005、今岡編 2009），これらは前期中葉から後葉に造られたと考えられる。出雲平野において、湖陵町内とその周辺は前期に古墳の造営が盛んであった地域であることが分かる。また、出雲平野中央部とその周辺では西谷古墳群内における前期後葉の長方墳と考えられる西谷7号墳、同じく前期後葉の前方後円墳である大寺古墳（東林木町、100）、詳細時期が不明な方墳の権現山古墳（大津町、85）などが知られる（萩編 2003、仁木編 2005、坂本編 2006）。

前期の集落は弥生時代中期以降から継続することが多いが、古志本郷遺跡や下古志遺跡では集落を廻る溝に大量の土器が廃棄されるなど（米田・三原編 2001、守岡編 2003），大規模な集落が衰退する様子がうかがえる。また、湖陵町周辺において御崎谷遺跡や玉泉寺裏遺跡、間谷東遺跡（知井宮町、55）などで前期の遺物が一定量出土するほか（景山・曾田編 2008、今岡編 2009），中上II遺跡（東神西町、45）では、弥生時代終末頃から前期初頭頃の土器の廃棄を伴う水辺の祭祀が確認され（深田・園山編 2020），その時期の集落が存在したことを示唆する。

中期初頭の古墳には、奥才型木棺と呼ばれる棺内襍敷組合式木棺を持つ間谷東古墳（知井宮町、54）が出現する（景山・曾田編 2008）。この埋葬施設は北部九州から北近畿にかけて広く展開しており、日本海沿岸にまたがる当時の地域間交流の一端を示している。また中期中葉に前方後円墳の北光寺古墳（東神西町、46）が築かれ（仁木編 2007），この時期の出雲地方において最大級の規模を誇る。その他、湖陵町内では、舟形石棺が出土した雲部古墳群（11）の雲部3号墳が知られ（西尾・野坂 2000、野坂編 2000），その周辺では浜井場2号墳（東神西町、50）や丁之内古墳（東神西町、51）が存在するなど（川上 1981、岸編 2005），この時期において、出雲平野西部は古墳が集中する地域となっている。一方、出雲平野中央部では弥生時代後期の西谷古墳群から連綿と続く西谷古墳群や池田古墳（上塙治町、75）が知られるにとどまる（川上ほか編 1993、米田編 2001、坂本編 2006）。

中期の集落に関連する遺跡としては、湖陵町内では前期後葉から中期の土器がまとまって出土した只谷III遺跡（21），周辺地域においては前期後半から中期前葉の住居跡が見つかった浅柄遺跡、土器を伴う水辺の祭祀が行われた九景川遺跡などが確認されている（西尾・野坂 1995、園山編 2000、池淵

編 2008)。出雲平野中央部でも弥生時代から断続的に継続する中野西遺跡(中野町, 90)や中野美保遺跡でまとまった遺物が出土したほか(坂本編 2002, 仁木編 2004), 中野清水遺跡や三田谷 I 遺跡においては複数の竪穴住居跡などが見つかり, 集落での活動が盛んであった様子が見て取れる(今岡・梶田編 1999, 久保田・渡邊編 2005)。なお, 三田谷 I 遺跡では九景川遺跡と同様に水辺の祭祀に関連する遺構が確認されている。

後期の古墳は湖陵町内で倉道古墳群(12), その周辺では砂原古墳(多伎町, 40)などが知られるにとどまるが(西尾・野坂 2000, 松尾編 2004), 出雲平野中央部では大規模な首長墳が相次いで築かれる。神戸川右岸に出雲地方最大規模の前方後円墳である今市大念寺古墳(今市町, 84)をはじめ, 切石造りの整美な横穴式石室を持つ上塙治築山古墳(上塙治町, 78)や上塙治地蔵山古墳(上塙治町, 76)が出現する(勝部・西尾編 1980, 川上編 1988, 松本編 1999, 三原・高橋編 2004, 坂本編 2018)。神戸川左岸には首長墳に次ぐ規模の妙蓮寺山古墳(下古志町, 63)や放レ山古墳(古志町, 68), 宝塚古墳(下古志町, 64)などが营造される(山本 1964, 勝部・西尾編 1980)。こうした首長墳を中心とした古墳群の营造が終息に向かう終末期には, 出雲平野で大規模な横穴墓群の構築が顕著になる。首長墳が展開した神戸川右岸において, 現在 235 基が確認される上塙治横穴墓群(上塙治町, 74)は全国でも屈指の規模を持つ横穴墓群であり, 22 支群からは金糸や金製の環などの豊富な副葬品が出土した(守岡正編 1998)。神戸川左岸には神門横穴墓群(神門町・知井宮町, 53)が構築され, 現在までにおよそ 123 基が確認されている(米田編 1995)。横穴墓群は出雲平野全域に波及し, 神戸川左岸以西では井上横穴墓群(古志町, 69), 地蔵堂横穴墓群(下古志町, 62), 湖陵町内では八幡宮横穴墓群(17), 安子神社横穴墓群(7), のの子谷横穴墓群(8)などが築かれる(松山編 1994, 野坂編 2000, 守岡正編 2017a)。多伎町内でも正南横穴墓群(35)や後谷横穴墓群(37), 砂原小山横穴墓群(38)などが知られる(松尾編 2004)。

後期の集落は, 中期から継続する中野美保遺跡や中野清水遺跡, 三田谷 I 遺跡など出雲平野中央部で引き続き確認できる。湖陵町内では, 竪穴建物跡が確認された板津焼山遺跡, 庭反 I・II 遺跡や只谷 I~III 遺跡, 三部竹崎遺跡などで集落が存続しており(西尾・野坂 1995, 石原編 2013), 湖陵町周辺でも浅柄 III 遺跡(知井宮町, 57)で掘立柱建物跡が確認されている(守岡正編 2017b)。

奈良・平安時代

奈良時代は律令国家の成立に伴って各地に国・郡制が整備される。733 年に奏上された『出雲國風土記』によると, 出雲国には 9 つの郡と 61 の郷があり, 現在の出雲市域はそのうち櫛縫郡, 出雲郡, 神門郡, 飯石郡の 4 つの郡に属していた。出雲平野は出雲郡の一部と神門郡で構成され, 出雲郡の官衙関連施設には礎石建物跡や神社施設と思われる総柱建物跡, 墨書き土器や神像, 絵馬などが発見された青木遺跡や, 三彩多口瓶や墨書き土器が出土した鹿藏山遺跡(大社町, 106)が確認されている(石原編 2005, 今岡ほか編 2006)。神門郡の郡家は古志郷にあり, 古志本郷遺跡で見つかったし字の長舎建物跡や正方位の区画溝を持つ規則的な建物跡群がその関連施設であったと推定されている(松尾編 2003)。神門郡におけるその他の官衙関連施設の痕跡は, 天神遺跡や三田谷 I 遺跡などで見つかっており, 天神遺跡では倉庫とみられる大型の総柱建物跡のほか墨書き土器や綠釉陶器が確認され(横山ほか

か編 1977), 三田谷 I 遺跡では墨書き土器や木簡が出土した(熱田編 2000)。

この時期には各地で火葬墓が見つかっており、神戸川沿岸部では石櫃が確認された小坂古墳(馬木町, 70)や光明寺3号墓(上塩治町, 72), 石製蔵骨器が出土した菅沢古墓(上塩治町, 79)や朝山古墓(朝山町, 71)などが知られている(勝部・西尾編 1980, 高橋・片倉編 2000)。出雲郡宇賀郷に属する猪目洞窟遺跡(大社町, 103)は『出雲国風土記』に記された「黄泉の穴」として知られ、弥生・古墳時代の人骨が出土し、なかには貝輪を装着した人骨も確認される一方で、土器や石器なども出土しており、ある時期には生活の場として利用されていたことが分かっている(松本・松尾 2002)。

古代寺院跡については、長者原魔寺跡(上塩治町, 80)や新造院と推定される神門寺境内廃寺跡(塩治町, 81)が古くから知られる(勝部・西尾編 1980)。湖陵町を含めた神西湖周辺は神門郡の古志郷と多伎郷に挟まれた滑独郷にあたり、湖陵町内では掘立柱建物跡などが確認された京田遺跡、庭反II遺跡や常楽寺遺跡(5), 周辺地域においては多数の建物跡や掘立柱建物跡が確認された九景川遺跡や浅柄遺跡は集落跡であると考えられる(杉原ほか編 1987, 園山編 2000, 池淵編 2008, 勝部編 2017)。奈良時代に開かれた天台宗の古刹である華藏寺(多伎町, 34)には、平安時代中後期の作とされる毘沙門天立像が安置されている(松尾編 2004, 『久村の歴史』編集委員会編 2011)。

また、神西湖は「神門水海」として『出雲国風土記』に登場し、「出雲大川」と呼ばれた当時の斐伊川と神戸川が注ぎ込み、現在の神西湖よりも水域が広く汽水環境であったことが記されている。この神門水海の周辺には古代から中世にかけて貝塚が形成されており、湖陵町内の常楽寺遺跡や御領田遺跡のほか、上長浜貝塚や大社町の中分貝塚(大社町, 108)などが知られる(石井編 1981, 杉原ほか編 1987, 角田・野坂編 1994, 川上・湯村編 1996)。特に、上長浜貝塚は古代の貝塚としては全国でも最大級の面積であり、奈良・平安時代以降にかけて神門水海の資源を積極的に利用していたことを示している。

中世

鎌倉時代に出雲国の守護となった佐々木氏は、塩治郷を拠点として塩治氏を称し、領国支配を行った。出雲平野中央部の築山遺跡で確認された礎石建物跡や区画溝、貿易陶磁器などはこの時期の塩治氏に関連するとみられる(原編 2009)。蔵小路西遺跡では掘立柱建物跡が確認されて大量の貿易陶磁器が出土しており、有力な国衙在官人である朝山氏の居館跡と考えられている(間野編 1999)。貿易陶磁器については、荻杵古墓(荻杵町, 97)で青磁の優品が出土している(勝部・西尾編 1980)。その他、大型建物跡や最古級の将棋盤が確認された高浜I遺跡(高岡町, 96)も居館跡の可能性があると考えられる(今岡編 2011)。

出雲大社境内遺跡(大社町, 104)で発見された、3本の柱を結束して1本の巨大な柱とした社殿跡は13世紀後半頃のものに比定され、当時の出雲大社(杵築大社)の本殿はかなり大きな掘立柱の構造であったことが分かる(景山ほか編 2004, 穴道編 2018)。また当時の出雲大社と双壁をなしたのが島根半島の北山山系に立地する鰐淵寺(別所町, 102)であり、境内において複数時期に大規模な造成工事が行われたことが分かっている(石原ほか編 2015)。

湖陵町内で中世以降の集落跡と考えられるのは、建物跡や青磁などが見つかった庭反II遺跡や常楽

寺遺跡のほか（杉原ほか編 1986・1987），掘立柱建物跡や柵列跡が確認された三部八幡下遺跡や岡屋・新花前遺跡（湖陵町，22）が挙げられる（野坂編 1995b，西尾・野坂 2000）。また，湖陵町周辺でも麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡（西神西町，42）で建物跡が確認されており（勝部編 2017），この時期に多くの集落が存在していた様子がうかがえる。

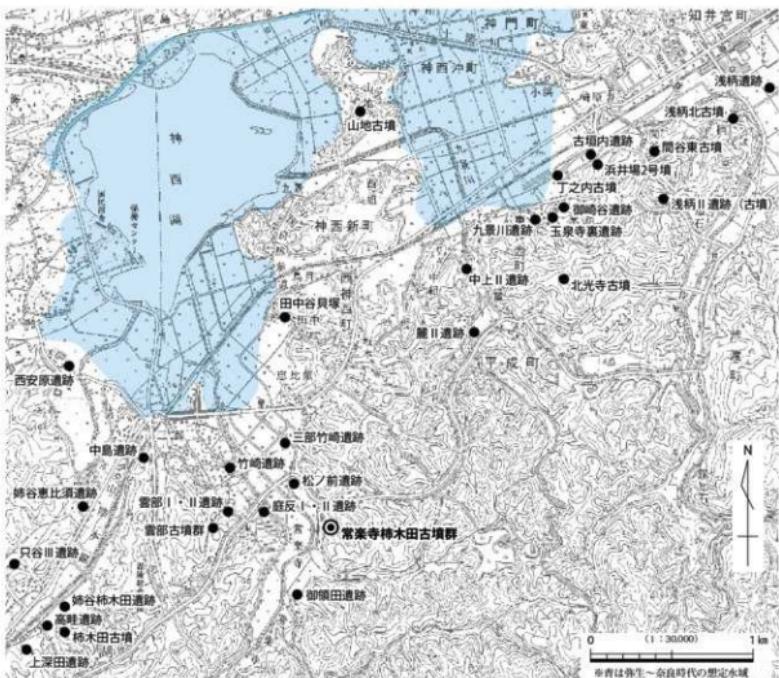
室町時代から戦国時代には出雲平野周辺で多くの山城が築かれる。毛利氏が尼子氏復興戦の際に攻略の拠点とした島根半島の北山山系に立地する鳶ヶ巣城跡（西林木町，99）や，鎌倉時代から続く神西氏代々の居城で出雲十旗に數えられる神西城跡（東神西町，43）が知られ（勝部・西尾編 1980，山根 1993・2013），湖陵町内にも姉谷城跡（23）や要害山城跡（27）などいくつかの山城が存在する（山根 1993）。また，神西城跡に近接する麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡，中上Ⅱ遺跡では防衛施設と推定できる柵列が確認された（勝部編 2017，深田・圓山編 2020）。

近世・近代

近世の集落について，湖陵町では保知石谷遺跡（18）や三部八幡下遺跡で墓や建物跡などが見つかっているが（野坂編 1995b），集落全体の様相は不明瞭である。多伎町で確認された近世後世の雲州久邑長沢焼窯跡（28）は，山陰地方で最も早い時期の磁器生産の窯跡として知られ，精巧な優品から日常雑器まで幅広く生産されていた（松尾編 2004，『久村の歴史』編集委員会編 2011）。

中世から近世にかけて，出雲地方の山間部でたたら製鉄が盛んに行われ，砂鉄採取ための鉄穴流しによる大量の土砂が斐伊川や神戸川によって下流に運ばれた。また近世の前半期に差海川が開削されて水域が縮小し，神西湖はほぼ現在の形となっている。出雲西部においてもたたら製鉄が盛行し，近世初期には，奥出雲町の可部屋櫻井家から分家した田儀櫻井家がたたら製鉄業を営み，多伎町奥田儀を拠点として出雲国屈指の鉄山師（たたら製鉄の経営者）にまで成長する。詳細な位置は不明であるが，多伎町の赤松鉄穴（30）で鉄穴流しを行っていたことが文献史料に記されており（『久村の歴史』編集委員会編 2011），田儀櫻井家の製鉄経営を支えた基幹的なたたら場であった多伎町の越堂たたらへの砂鉄供給地となっていた。

この地域は近代でも重要な砂鉄の供給地であり，昭和初期に国内で鉄鉱資源の需要が高まり，1940（昭和 15）年から探鉱場や選鉱場など近代的な設備を整えた久村鉱山（多伎町，31・32）が操業されていた（仁木・福田編 2019）。また，近接する湖陵町の姉谷鉱山（29）でも砂鉄採掘が行われ，これまでに複数の坑道が確認されており，近代的な久村鉱山とは対照的に人力作業で採掘していた小規模な鉱山としての実態を示している（東山ほか編 2018）。久村鉱山では最盛期には多くの精鉱を生産したが，1949（昭和 24）年には過度経済力集中排除法により閉山を余儀なくされた（『久村の歴史』編集委員会編 2011）。



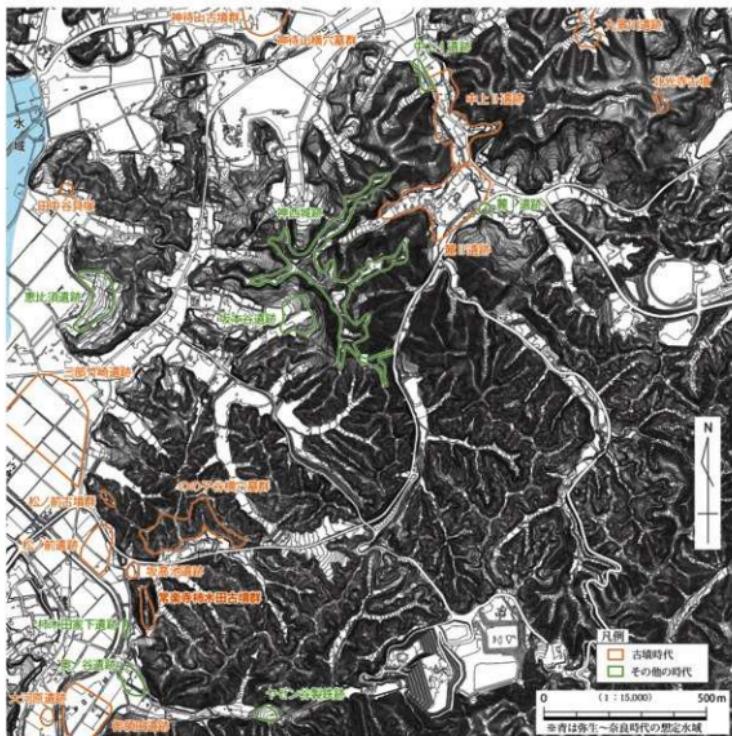
第11図 湖陵町周辺における古墳時代前期・中期の主要遺跡の分布

第2表 歴史的環境の参考文献一覧

著者	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・掲載文献・掲載頁	発行機関
足立克巳編	1999	郵原山西遺跡	一般国道19号沿線バス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1	鳥根県教育委員会
熱田貴保編	2000	三田谷I遺跡 (Vol. 2)	愛伊川用水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
池澤尚一編	2008	九重川遺跡	一般国道19号インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	鳥根県教育委員会
石井 悠編	1981	鳥根県埋蔵文化財調査報告書2	—	鳥根県教育委員会
石原 啓編	2005	大庭山遺跡	大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書	大社町教育委員会
石原 啓編	2013	御津熊山遺跡	出雲市道網計画津上地区西整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書・出雲市の文化財附則24	出雲市教育委員会
石原 啓・穴道弘・野坂徹之・二原一時編	2015	出雲縣立寺理藏文化財調査報告書	出雲市文化財報告28	出雲市教育委員会
伊藤 哲編	2000	三田谷III遺跡	愛伊川用水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X	鳥根県教育委員会
今岡一三編	2009	御津谷遺跡 間谷東遺跡 浅柄北古墳 間谷内II遺跡 間谷内古墳群	愛伊川用水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X	鳥根県教育委員会
今岡一三編	2011	高浜I遺跡	一般国道19号インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
今岡一三・柳田勝造編	1999	三田谷I遺跡 (Vol. 1)	愛伊川用水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V	鳥根県教育委員会
今岡一三・平石 光・松尾光紀編	2006	吉木神社II (弥生～平安時代)	国道431号道路改築事業(吉木林ハイバス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥根県教育委員会

編著	発行年	文献名・論文名	シリーズ名・収載文献・掲載頁	発行機関
今岡一三・鶴部利明編	2010	砂原申延古道跡・砂原1号道跡	一般国道多岐インターフィー建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
角田伸幸編	2006	中野清水道跡(3)・白枝本郷道跡	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7	島根県教育委員会
鈴木幸司・野坂徳之編	1994	神山地区(大内宿)整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 碑面道跡 三部竹町道跡	—	湖陵町教育委員会
鈴山直一・石原 駿・松尾光晶編	2004	出雲大社境内道路	—	大社町教育委員会
鈴山直一・曾田辰雄編	2008	玉皇寺道跡・浜井堀4号墳・圓谷東古墳	一般国道出雲インターフィー建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II	出雲市教育委員会
鶴部 哲・西田克巳編	1980	出雲・上島治跡地を中心とする埋蔵文化財発掘調査報告書	—	島根県教育委員会
鶴部哲編	2017	蟹ノ道跡・祝木道跡・京田道跡(116)	一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	島根県教育委員会
川上 樹	1981	丁ノ内古墳の発掘調査	出雲市西岡基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 13~18頁	出雲市教育委員会
川上 樹編	1986	山地古墳発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
川上 樹編	1988	史跡今大念吉古墳保存修理事業報告書	—	出雲市教育委員会
川上 樹・鶴村 功・米田美江子編	1993	西脇15、16号墓発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
川上 樹・鶴村 功編	1996	上長浜貝塚	—	出雲市教育委員会
川原和人編	2003	解ノ前道跡・背原1号道跡・クホ山道跡・菅原日御神・菅原1号道跡・菅原2号道跡(穴道~出雲間)建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	—	島根県教育委員会
厚 道二編	1997	大神道跡第7次発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
厚 道二編	2002	丹原道跡発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
厚 道二編	2005	浜井堀古跡群発掘調査報告書	—	出雲市教育委員会
久保山一・渡邊英美子編	2005	中野清水道跡(2)	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6	島根県教育委員会
久村の歴史 編集委員会編	2011	久村の歴史	—	久村地区総合自治会
坂本貴治編	2002	中野道跡	出雲市北部第一土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書	出雲市教育委員会
坂本貴治編	2006	西谷頃墓原~平成4~16年度発掘調査報告書—	—	出雲市教育委員会
坂本貴治編	2010	久野道跡	新内環状改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 / 出雲市の文化財報告10	出雲市教育委員会
坂本貴治編	2018	上飯治塙山古墳の再検討	出雲市立の森博物館研究紀要第1集	出雲市立の森博物館
宍道空弘編	2018	出雲大社境内道路(旧日本道路)出土品保存修理報告書	—	出雲大社
瀬西隆博編	2018	白枝荒神道跡	商業施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 / 出雲市の文化財報告38	出雲市教育委員会
柏原一・藤原友子・鶴田尚武編	1986	庭原II道跡・昭和60年度急伐発掘調査報告書	—	湖陵町教育委員会
柏原一・藤原友子・鶴田尚武編	1987	庭原II道跡・柏 和61年度調査報告書	—	湖陵町教育委員会
鷗山 薫編	2000	浅納道跡	西出雲郡治上岸地区整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
鷗山 薫編	2002	小字道跡第3地点発掘調査報告書(第4次発掘調査)	—	出雲市教育委員会
高橋智也・片倉愛美編	2000	光明寺3号墳・4号墳	奥伊川使水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	出雲市教育委員会
同志社大学出雲古文化調査組	1959	出雲古文化調査団報告	同志社大学人文科学研究所記録第2号 1~106頁	同志社大学人文科学研究所
鳥谷万葉編	2000	三田谷1道跡Vol. 3	斐伊川使水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
仁木 勝編	2004	中野美保遺跡	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4	島根県古代文化センター
仁木 勝編	2005	今寺1号墳発掘調査報告書	島根県古代文化センター調査研究報告書29	島根県古代文化センター
仁木 勝編	2007	北光寺古墳発掘調査報告書	島根県古代文化センター調査研究報告書36	島根県古代文化センター
仁木 駿・鶴田市子編	2019	久村鎌山跡~源範局の調査―(三) 株式会社日立製作所安永工場久村跡(1)	一般国道9号(湖陵佐佐道跡)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	島根県教育委員会
西尾克己・野坂徳之	1993	神西湖堤の集落道路	湖陵町誌研究4 12~36頁	湖陵町教育委員会
西尾克己・野坂徳之	2000	古代古代の湖陵町	湖陵町誌 147~240頁	湖陵町

編著	発行年	文獻名・論文名	シリーズ名・開設文獻・開設頁	発行機関
野坂俊之編	1995a	一般施設物置施設管理道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書「古志・弓削・谷造跡」	—	湖陵町教育委員会
野坂俊之編	1995b	神南地区(弓削・手取・基原)整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書(第3工区)「弓削1・2・3工区・三井八幡下道路・中島下道路」	—	湖陵町教育委員会
野坂俊之編	2000	湖陵町道路地図	—	湖陵町教育委員会
萩 重人編	2003	長船道路Vol. 2 権現山古墳	垂伊丹市小路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII	鳥根県教育委員会
鶴谷光輔編	2019	京田道跡4区	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「出雲市文化財報告書59」	出雲市教育委員会
原 伸一編	2009	鶴谷道跡	點吉今古志郡改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「古志・香川・出雲市文化財報告5」	出雲市教育委員会
原田敏郎編	2009	山田道跡Vol. 5 (6区)	国道431号追加改良事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7	鳥根県教育委員会
東山信治・鈴川徳幸・松尾光洋・神村靖彦	2018	出雲市湖陵町神谷郡山跡測量調査報告	古代文化研究No.26号 77 ~ 90頁	鳥根県古代文化センター
大見麻生編	2017	玉泉寺遺跡(VII・VIII)・九星川遺跡(VI)	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
深田 浩・鷲山 順編	2020	京田道跡2区 中上2区遺跡	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6	鳥根県教育委員会
藤本照弘編	2002	海上道跡	出雲市民病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
松尾光亮編	2003	古志本郷遺跡Ⅶ 出雲国神門郡家道遺跡の調査	垂伊丹市小路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XVI	鳥根県教育委員会
松尾光亮編	2004	多住郷の考古学	—	多住町ライオンズクラブ
松藤人夫編	2013	砂原田石造跡の研究—鳥根県多住町砂原所在砂原道跡発掘調査報告書—	—	砂原道跡学術発掘調査会
松本弓雄編	1999	上塙治築山古墳の研究	鳥根県古代文化センター調査研究報告書4	鳥根県古代文化センター
松本弓雄・松尾光亮	2002	猪目洞窟遺物包含層について	大社町史料編(民俗・考古資料) 493 ~ 555頁	大社町
松山智弘編	1994	地城空堀六号墓発掘調査報告書	下古庄地区一般農道整備事業埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
松山智弘編	1998	古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書	小道川遺跡新開道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
野野木大承編	1999	小綿小路遺跡	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2	鳥根県教育委員会
三原一村編	2000	山田道跡	市道矢掛古志綿小路歩道整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
三原一村・高橋智也編	2004	上塙治築山古墳	—	出雲市教育委員会
宮本正保編	2019	常楽寺本山古墳群・一坐時代集落の調査—	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5	鳥根県教育委員会
村上 勇・加村健次・ 植村克也編	1986	出雲・原山道跡発掘調査概要—鳥取県岩美郡人丸町—	—	大社町教育委員会
守則正司編	1998	上井里遺跡・葛原古墳・大井古墳・上塙治横穴集落第7・ 12・22・23・33・35・36・37支群	垂伊丹市小路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	鳥取県教育委員会
守則正司編	2017a	のひの子谷穴古墓・京田道跡31区	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3	鳥根県教育委員会
守則正司編	2017b	浅井道跡	一般国道9号(出雲御陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4	鳥根県教育委員会
守則利榮編	2003	古志本郷遺跡VII-K6の調査—	垂伊丹市小路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XIV	鳥根県教育委員会
山根正明	1993	湖陵町と飯石の中世城館について(一)	湖陵町道研究2 12 ~ 25頁	湖陵町教育委員会
山根正明	2013	神西城跡	出雲の山城 179 ~ 185頁	ハーベスト出版
山本 信	1964	妙蓮寺山古墳調査報告	—	鳥根県教育委員会
横山純夫・卜部吉博・ 松本弓雄編	1977	天神道跡	国立鳥取医科大学教職員宿舎建設にかかる緊急発掘調査報告	出雲市教育委員会
米田美江子編	1995	小糸山縄文墓群	—	出雲市教育委員会
米田美江子編	2001	進田古墳	一般V字型用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田美江子・ 三原一村編	1997	白佐葉室遺跡	市道松木下小山跡改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田美江子・ 三原一村編	2001	下古志道跡	一般国道2号後方曲面出雲改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
米田美江子・ 三原一村編	2005	淡山遺跡1	野辺山遺跡三刀削跡改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	出雲市教育委員会
渡邉直幸・坂本貴之編	2015	西谷3号墓発掘調査報告書	鳥取大学考古学研究会調査報告第14期 出雲市立の森博物館研究紀要第5集	鳥取大学考古学研究会 出雲市立の森博物館



①常楽寺柿木田古墳群上空から
神西湖と北山山系を望む（南から）



②常楽寺柿木田古墳群上空から
中国山地を望む（北東から）

第12図 常楽寺柿木田古墳群周辺の主要遺跡の範囲（上）と周辺の遠景（下）

第3章 発掘調査の成果

第1節 既往調査の成果とまとめ

常楽寺柿木田古墳群は、1998（平成10）年度から1999（平成11）年度にかけて当時の湖陵町教育委員会が実施した分布調査のなかで発見され、2019（令和元）年度に今回の発掘調査が行われるまでに島根県教育委員会が複数年にわたって試掘確認調査を実施している（第1章第1節）。今回の調査の位置づけを明確にするため、ここではこれら既往の調査成果について整理するとともに（第3表）、既刊の報告書（野坂編2000、宮本編2019）や関連資料をもとに概要をまとめておきたい。

1 湖陵町教育委員会による分布調査・測量調査の成果

湖陵町内の埋蔵文化財の分布やその性格などを把握することを目的に、1998年度および1999年度に当時の湖陵町教育委員会が実施した分布調査において、湖陵町内の丘陵ではそれまで知られていなかった古墳が数多く見つかった。常楽寺柿木田古墳群もその一つである。

古墳群が所在する丘陵上には植物が繁茂していたが、丘陵の最高位に盛土状の高まりが明確に確認され、そこから北側に向かった急傾斜直前の尾根上にも高まりが認められた。これらは古墳の可能性があり、前者を常楽寺柿木田1号墳、後者を常楽寺柿木田2号墳として位置づけ、後者は一辺が11m程度の方墳であると認識された⁽¹⁾。

1号墳の墳頂の標高は約37mを測り、北側と西側への眺望が利く好立地となっている。盛土状の高まりの南側は墓地造成などでかなり削平を受けていると考えられたが、前方後円墳の可能性があつたため、1999年度に測量調査が行われることになった。測量調査の結果、前方部に相当する部分が大きく削平されていたため、明確な判断を行うことができなかったが、前方後円墳の場合には復元全長が30mを測り、また前方後円墳でない場合には長径が約19m、短径が約15mの楕円形墳になると予想でき、いずれにしても湖陵町内で最大級の古墳となることが把握された（第13図左）。

2 島根県による試掘確認調査・発掘調査の成果（第14図）

一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事は、2005（平成17）年度に国土交通省による出雲仁摩線として都市計画の決定によって具体的に事業化され、2008（平成20）年度から本格的に進められてきた。そのなかで事業予定地内の分布調査が島根県教育委員会と出雲市文化財課によって行われ、常楽寺柿木田1号墳の一部が予定地に隣接する可能性が判明した。

（1）2010年度試掘確認調査

こうした状況を踏まえ、古墳の規模や墳形、時期などの把握のために、島根県教育委員会は2010（平成22）年に5箇所のトレンチを設定して試掘確認調査を行った。墳丘の測量調査が改めて実施された後に墳丘端部と考えられる位置にトレンチが設定され、試掘確認調査が実施された⁽²⁾。調査では4・

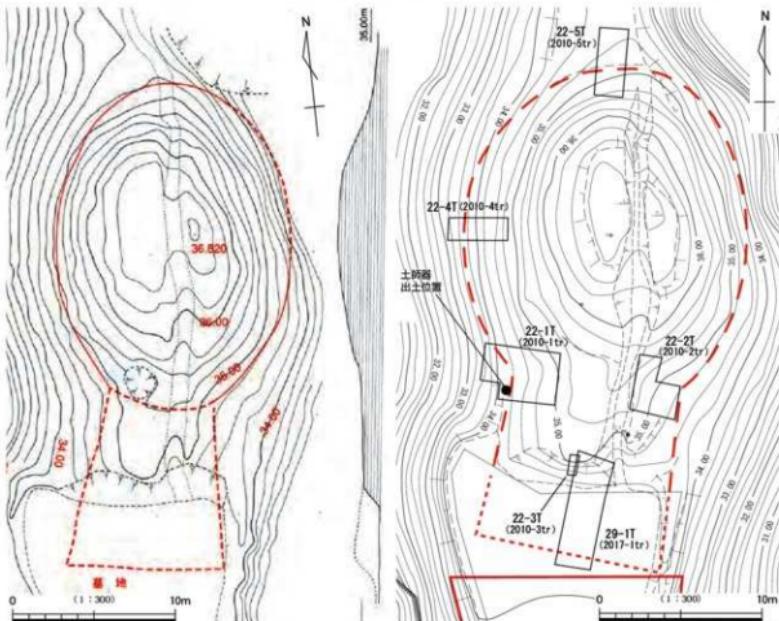
5トレンチで墳丘端部を示すとみられる傾斜変換点が認められたほか、1トレンチで地山がくびれ部上に湾曲している状況が観察され、前方後円墳の要素が確認されている。また1トレンチでは、くびれ部に相当する位置で土師器の甕が出土しており⁽³⁾（第3章第3節第28図）、古墳の築造時期を考えるうえで重要となる。

（2）2014年度試掘確認調査

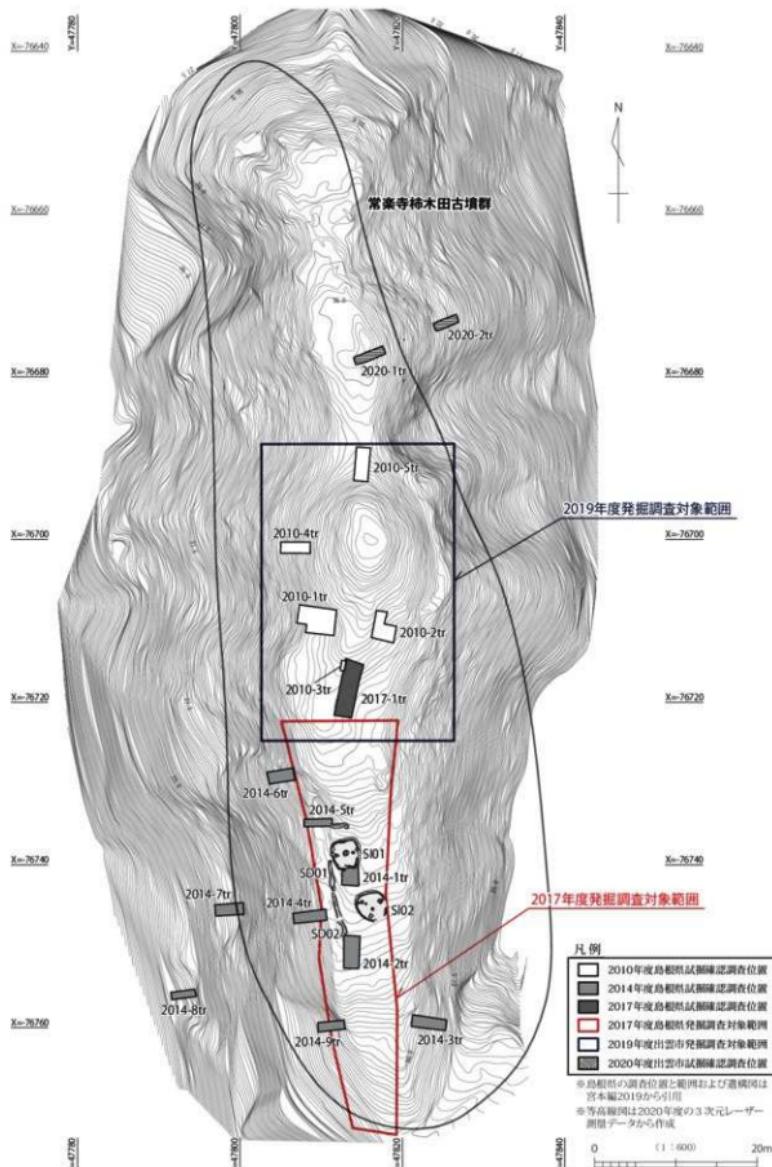
常楽寺柿木田古墳群は、常楽寺柿木田1号墳から南に延びる丘陵上までが周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲となっており、その丘陵南側について島根県教育委員会が9箇所のトレンチを設けて2014（平成26）年度に試掘確認調査を実施した。1トレンチでは溝状の落ち込みと弥生土器が確認されたほか、2トレンチで溝状の落ち込み、5トレンチで弥生土器が確認されたことから、弥生時代の遺構が存在する蓋然性が高まり、試掘確認調査した範囲を中心に丘陵南側の発掘調査が必要であると判断された。出土した弥生土器は甕および鼓形器台であり、総じて弥生時代の後期後半頃に比定されている。

（3）2017年度発掘調査

2014年度の試掘確認調査の結果を踏まえ、丘陵上南側の全面的な発掘調査が島根県教育委員会によって2017（平成29）年度に実施された。調査区北側は後世の墓地の造成で削平されていたが、調査区中央では弥生時代の竪穴建物跡2棟（SI01・SI02）と時期不明の溝状遺構2条（SD01・SD02）が見つかった。竪穴建物跡SI01からは弥生時代後期後葉の草田3期と考えられる鼓形器台が出土して



第13図 常楽寺柿木田1号墳の想定復元図（左：野坂編2000 右：宮本編2019）



第14図 常楽寺柿木田古墳群の試掘確認調査および発掘調査の位置と範囲

おり、その時期の所産である可能性が高い。また竪穴建物跡 S102 も包含層出土遺物から草田 2 ~ 4 期と推定されるため、竪穴建物跡 S101 と概ね同じ頃に形成されたとみられ、丘陵上に弥生時代後期後葉の小規模な高地性の集落が展開していたことが明らかになった。弥生時代の高地性の集落跡は出雲平野のなかでは事例が少なく、この時期の集落様相を考えるうえで重要となる。

(4) 2017 年度試掘確認調査

2017 年度は、島根県教育委員会が丘陵上南側の全面的な発掘調査を実施するとともに、丘陵北側に存在する常楽寺柿木田 1 号墳の前方部先端の確認を目的に 1 箇所のトレーナーを設けて試掘確認調査を行った。トレーナーの南半分が後世の墓地が存在した範囲であり、墓地造成に伴う土坑が確認されている。その他に東西方向の溝状構造も確認されているが、古墳に伴うものではないと判断され、前方部の埴丘端部を示す明確な痕跡は確認されなかった。なお、試掘確認調査の報告（宮本編 2019）のなかでは、墳長 30m の前方後円墳として常楽寺柿木田 1 号墳の想定復元図が示されている（第 13 図右）。

註

- (1) 2 号墳の位置を正確に把握するために、2019 年度の発掘調査のなかでも周辺を踏査したが、明確な盛土などの高まりは確認できなかった。
- (2) 墓丘の南側では、想定される前方部先端ではなく現存する埴丘端部にトレーナーが設けられた（宮本編 2019）。なお、島根県教育委員会が実施したこれまでの試掘確認調査の内容については、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの宮本正保氏にご教示をいただき、参考となる関連資料の提供を受けた。
- (3) 土師器は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの所蔵資料であり、今回の報告書刊行に伴う図面作成や図版掲載のための写真撮影などをを行うにあたり、同センターから許可を得て借用した。なお土師器の観察内容や位置づけについては、第 3 章第 4 節にて詳しく記述する。

参考文献

- 野坂俊之編 2000 『湖陵町遺跡地図』 湖陵町教育委員会
 宮本正保編 2019 『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 島根県教育委員会

第3表 既往調査成果のまとめ

調査主体	調査年度	調査内容	主な調査成果
湖陵町教育委員会	1998・1999	分布調査	常楽寺柿木田古墳群（1 号墳・2 号墳）を発見
	1999	測量調査	常楽寺柿木田 1 号墳が前方後円墳（全長 30m）である可能性を想定
島根県教育委員会	2010	試掘確認調査	常楽寺柿木田 1 号墳で前方後円墳の要素（くびれ部など）や土師器甕を確認
	2014	試掘確認調査	丘陵南側で弥生時代後期後半の遺構や遺物の存在を確認
	2017	発掘調査 試掘確認調査	丘陵南側で弥生時代の高地性集落跡を確認 常楽寺柿木田 1 号墳の南端が後世の墓地造成などで削平された状態を確認

第2節 発掘調査の成果

湖陵町教育委員会や島根県教育委員会の調査成果で常楽寺柿木田1号墳が前方後円墳である蓋然性が高まった。その後、将来的な完成4車線道路供用の整備に伴う法面工事が古墳に影響する範囲について、2018（平成30）年度に行った現地確認で古墳の前方部南側と東半分および後円部東側の一部が範囲に含まれることが明確になった。それにより2019（平成31・令和元）年度に発掘調査を行う必要性が生じ、島根県教育委員会の全面的な協力を得て出雲市文化財課が発掘調査を実施することになった。完成4車線道路の整備に伴う法面工法は、発掘調査などの成果をもとに具体的な工法を検討する方針であったため、墳丘規模や墳丘の構築過程などの墳丘構造を正確に把握するとともに、墳丘の外表施設の有無、および主体部の残存状況やその規模・範囲・深さなどを明確にすることを目的として発掘調査を行った。なお、主体部内部は詳細な調査を実施せずに部分的な確認を行っている。

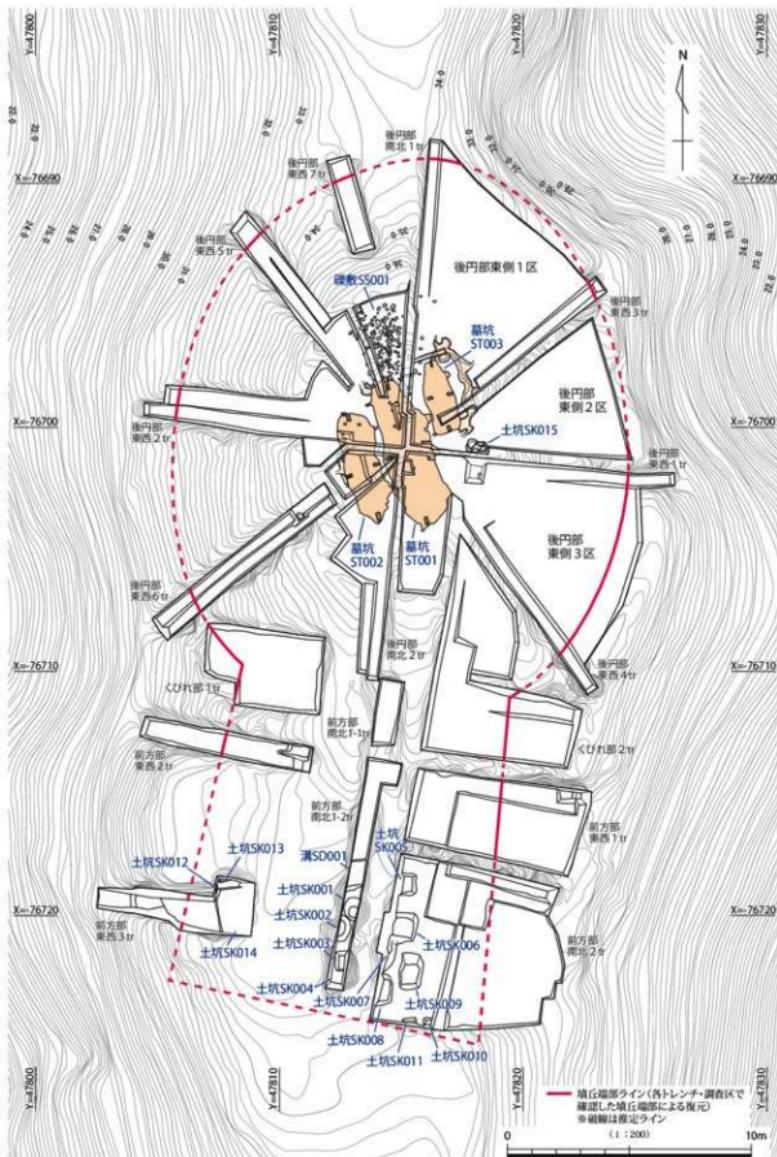
1 トレンチと調査区の設定（第15図）

常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模は、これまでの分布調査や測量調査、および試掘確認調査によって部分的に情報が得られていたが、完成4車線道路の整備に伴う法面工事による影響が大きい墳丘東側については、あまり確認されていなかった。今回の調査では、こうした状況を踏まえて、墳丘規模や墳丘の構築過程などの古墳の墳丘構造を正確に把握するための墳丘端部の確認を目的としてトレンチを設定した。トレンチは後円部に9箇所（後円部南北1・2トレンチ、後円部東西1～7トレンチ）、くびれ部に2箇所（くびれ部1・2トレンチ）、前方部に5箇所（前方部南北1・2トレンチ、前方部東西1～3トレンチ）設定し、トレンチ内の調査を実施した。各トレンチの土層堆積状況における詳細な観察事項については、第4表にて一覧で示した。また、墳丘東側では各トレンチの土層堆積状況を確認したうえで、外表施設の有無を確認した。後円部東側ではトレンチ間に調査区（後円部東側1～3区）を設けて墳丘面の精査を行った。なお第15図では、トレンチ位置と調査位置のほか、検出した遺構および各トレンチ・調査区で確認した墳丘端部を結んだ墳丘端部ラインを復元した。

2 主体部の調査

（1）電気探査の実施

発掘調査の実施前から後円部上には主体部が存在する可能性が指摘されており、発掘調査と並行して国土交通省が完成4車線道路の整備に伴う法面工事の設計に着手する必要があるため、発掘調査に先立って後円部上の電気探査を実施した（第4章）。電気探査による解析によって主体部の位置や規模およびその深さとともに、地山の位置が推定できる情報を発掘調査に先行して取得した。そのなかで頂部付近に長方形の窪みが確認され、主体部に関連する墓坑の掘り込みの可能性を示していると推定した。電気探査で確認された長方形の窪みは、やや大きさは異なるものの、後述する墓坑ST001の位置とほぼ重なることが発掘調査によって検証され、電気探査による解析で得られたデータは、地下の情報を推定できる有効な手段になり得ると考えられる。



第15図 常楽寺柿木田1号墳のトレチと調査区位置および造構全体図（2019年度発掘調査）

(2) 主体部の墓坑の調査(第16図、図版10~17)

後円部上では表土下に盛土(4~8層)が確認され、後円部上を全体的に覆っている様子を確認した。盛土下に主体部が存在する可能性が高いと考えられたため、土層堆積状況観察用のベルトを残しつつ、精査しながら表土と盛土を層位的に掘り下げていった。なお、盛土中の遺物などの有無については、主体部付近の盛土を中心に水洗篩別を実施するなかで確認した⁽¹⁾。

盛土を掘り下げると円礫を含む砂質の布志名層の地山(22層)が認められ、地山上面の精査を行ったところ、3箇所の掘り込みを確認した。これらは主体部の墓坑であると考えられ(墓坑ST001~ST003)、その範囲と形状を正確に把握するために全面的に検出した。3基の墓坑はそれぞれ規模が異なり、中央の墓坑ST001が最も大きく、次いで西側の墓坑ST002、最も小さいのは東側の墓坑ST003であった。また、後円部東西3・6トレンチの土層堆積状況(第20図)でも確認できるように、各墓坑には重複関係がないため、同時期または比較的近い時期に形成された可能性が高い。

なお、墳丘主軸上の後円部南北1・2トレンチの土層堆積状況(第17図)を見ると、後円部上の地山面は平坦に整っており、旧表土ではなく地山および地山風化土を削って墳丘面として平坦面を作出後に各墓坑を掘り込んだと考えられる。

墓坑ST001

主体部の墓坑のうち、墓坑ST001は最も規模が大きく、後円部の中心に位置する。規模は南北6.5m、東西2.4mを測る。墓坑の平面形は楕円形に近い隅丸の長方形であり、主軸方位は、N-15°-Wである。墓坑は盛土(7層)に被覆された状態であった。墓坑内部の詳細な調査は実施しておらず、正確な深さは不明であるが、墓坑の南北および東西端部に設けたサブトレンチから判断すると、墓坑上面から0.4m以上の掘り込みがあると推定できる。

サブトレンチの土層堆積状況により、墓坑埋土は上面から現状で2層(9・10層)確認できた。2層の埋土は色調が若干異なるが同質であり、また地山礫や地山ブロックを含んでいるため、地山や地山風化土の掘削土を埋土として利用したと考えられる。

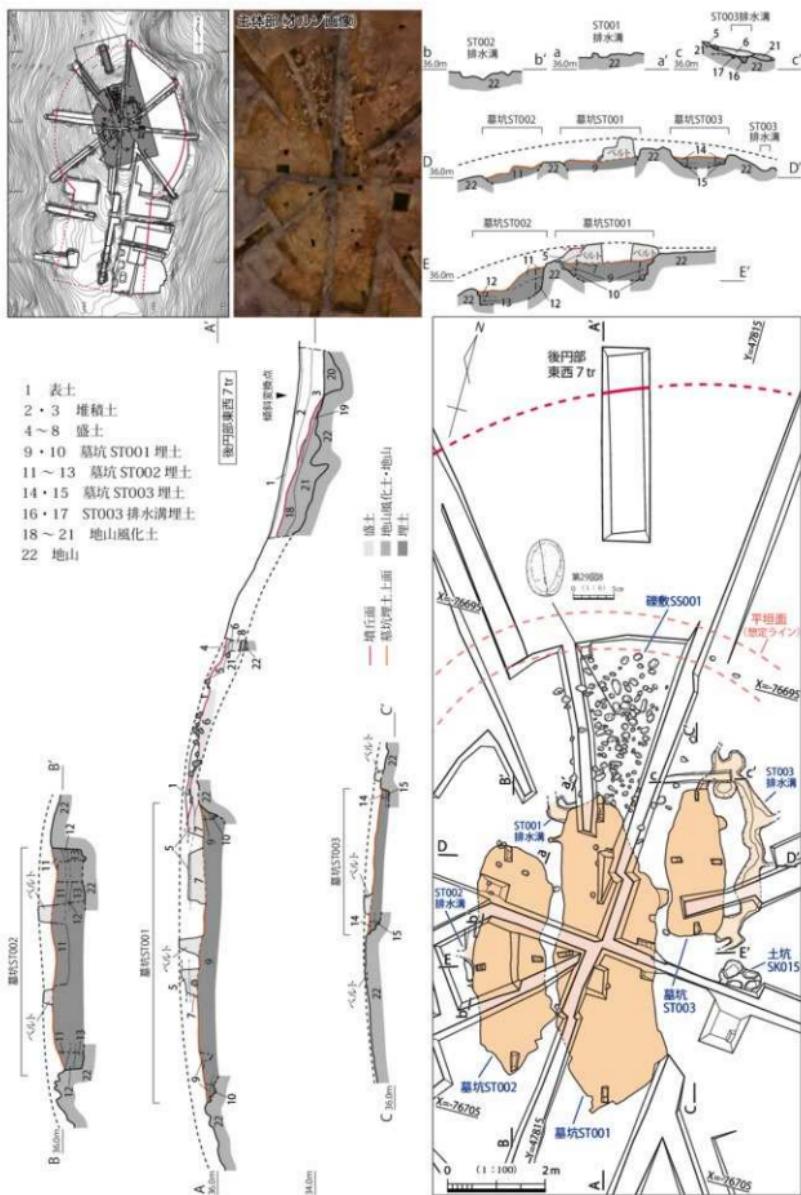
墓坑内の埋葬施設については、墓坑内部の詳細な調査を行っていないため不明である。木棺直葬の場合に生じることが多い木棺の腐朽に伴う陥没痕は、埋土の表面精査からは明確に確認できなかったが、墳丘主軸上の後円部南北1・2トレンチの土層堆積状況(第17図)のように、墓坑の中央付近の埋土上面がやや窪んでいる状況を確認した。

墓坑上面で標高が最も低い北西端部において、意図的に地山を削って作出した溝状の遺構を確認した。墓坑に伴う排水溝は通常、墓坑の底面付近に設けられて主体部内部の排水を担うことが多いが、ここで確認した遺構は、想定される墓坑の底面よりも高く、墓坑上面付近の高さに近いため、断定はできないが主体部周辺の排水などを目的に造られた溝(ST001排水溝)であると推測される。

遺物については、墓坑の表面精査やサブトレンチなどの埋土内からは確認できなかった。

墓坑ST002

後円部の中心にある墓坑ST001の西側には墓坑ST002が設けられている。墓坑ST001に次いで規模が大きく、南北4.7m、東西1.7mとなる。墓坑の平面形は、概ね隅丸長方形であると認識でき、



第16図 墓坑ST001～ST003・排水溝および後円部東西7トレーン平面図・土層断面図

主軸方位は墓坑 ST001 と同様に N-15°-W である。墓坑は墳丘西側斜面に位置し、東西端部で概ね 0.5m 程度の高低差が生じて西側が低くなる。一方、北側と南側は比較的高さが揃っており、南北方向は地山面を平坦に成形していたと考えられる。南北および東西端部のサブレンチなどにより、埋土上面からの深さは 0.6m 以上あると推定できる。

サブレンチなどの土層堆積状況から、墓坑埋土が 3 層（11～13 層）確認された。埋土の土質は地山と大きく異ならず、墓坑 ST001 と同様に地山や地山風化土の掘削土を埋土にしていた可能性が高い。なお後円部東西 1・2 レンチの土層堆積状況（第 19 図 22 層）に示されているが、底面に堆積する墓坑埋土には大型の円礫がまれに含まれている。

墓坑内の埋葬施設は墓坑内部の詳細な調査を行っていないため不明である。また埋土表面には陥没痕などは認められなかった。

墓坑の位置は、一部が墳丘斜面になるため西側が低くなる。その場所を意図的に削った痕跡を確認しており、主体部周辺の排水を意図した溝（ST002 排水溝）であると考えたい。なお、排水溝は想定される墓坑底面よりも高く、墓坑上面の高さに近い。

遺物は墓坑の表面精査では確認できず、またサブレンチの埋土内などからも見つかっていない。

墓坑 ST003

墓坑 ST003 は、墓坑 ST001 の東側で確認された。主体部の墓坑のうち、墓坑 ST003 の規模は 3 基のなかで最も小さく、概ね南北 3m、東西 1.3m で、墓坑 ST001 の半分程度である。墓坑の平面形については、他と同じく隅丸長方形であろう。主軸方位は墓坑 ST001 および墓坑 ST002 と同じく N-15°-W である。南北端部と東西端部のサブレンチから、墓坑の深さは現段階で埋土上面から 0.2m 程度であると考えられ、3 基の墓坑のうち最も浅い。なお、後円部上の北東斜面に近い位置に設けられ、若干の傾斜が認められるものの、東西方向とともに平坦に近い状態である。平坦に成形が可能な位置を選定して、地山および地山風化土を削って墓坑を形成したと推測される。

サブレンチの土層堆積状況により、墓坑の埋土は現状で 2 层（14・15 層）確認することができた。墓坑埋土は地山の土質と比較的類似しているため、他の墓坑と同様に地山や地山風化土の掘削土を埋土に利用したと考えられる。

墓坑 ST003 の埋葬施設も他と同様に墓坑内部の詳細な調査を行っていないため不明であり、また陥没痕などの埋葬施設に関する情報は得られなかった。

墓坑 ST003 は墳丘東側斜面のすぐ近くに位置し、墓坑の北東端部から南東端部までの東側全体を囲うように墳丘斜面に溝が認められ、3 基の墓坑のなかで最も明確な排水溝（ST003 排水溝）が設けられている状況を確認した。斜面側の 2 箇所が途切れて東側に開口しており、そこから墳丘下に排水する役割を果たしていたと考えられる。また排水溝は墓坑 ST003 の底面より低い位置に設けられており、主体部周辺および内部の排水を意図したと考えられる。

遺物については、表面精査やサブレンチの埋土内の確認を行うなかでは見つかなかった。

3 外表施設の調査

(1) 後円部の外表施設の調査（第16図、図版18・19）

後円部では埴輪や葺石などの外表施設の有無を確認するため、後円部東側を全面的に調査した。後円部の各トレンチで土層堆積状況を把握しつつ、各トレンチ間に設定した後円部東側1～3区の掘り下げを進めていった。後円部の中段から下段にかけては表土下に堆積土⁽²⁾が存在し、堆積土を掘り下げると地山風化土および地山を確認した。後円部東側1～3区において当時の埴丘面を確認して面的な精査を行ったが、外表施設となる埴輪や葺石などは確認できなかった。

一方、後円部上では表土を取り除くと盛土が存在することを確認しており、盛土によって後円部上および墓坑ST001～ST003が全面的に被覆されていた。土層堆積状況を把握しつつ、層序ごとに掘り下げを進めていきながら全面的な精査を行ったところ、後円部上の北西側で表土に混じった状態で存在する礫群を確認した。礫群を構成する石材は古墳周辺の河原などで採取したと考えられるデイサイトが中心であった⁽³⁾。礫群は人頭大の大きさを持つ円礫がわずかに存在するほかは、拳大の円礫がまばらに散乱する程度であり、あまりまとまりがなく、擾乱を受けて原位置を保っていない状況であると考えられた⁽⁴⁾。

礫敷 SS001

後円部上の精査を進めるなかで主体部の墓坑が3基確認されたが、墓坑ST001の北側において、埴丘面の盛土上に展開する礫敷SS001が見つかった。これは人頭大の円礫を主体としてその間に拳大の円礫をまばらに含むもので、やや粗密はあるが比較的丁寧に敷き詰められており、意図的に配置されたと考えられる。ただし、この礫敷SS001は埴丘全面には広がらずに墓坑ST001の北側にのみ配置されており、埴丘の中段から下段では確認できなかった。また、石材の種類は先述の礫群と類似しており、礫群の下面で見つかっている。よって総合的に判断すると、礫群は本来礫敷SS001の一部であり、現況よりもやや広い範囲で後円部の北西側を中心に礫敷SS001が設置されていたが、後世の墓地や墓道の造成などにより擾乱を受けて一部が散乱したと考えられる。

礫敷SS001には人頭大の円礫のほかに拳大の円礫も一部で確認されたが、そのなかに石の節理上に点刻がある円礫（第29図8）を確認した。詳細は第4節で述べるが、これは石材の自然作用を利用した縄文時代後期以降の人为的な石製品の可能性があると考えられる。常楽寺柿木田古墳群周辺には奥ノ谷遺跡や御領田遺跡、京田遺跡などの縄文時代遺跡がまとまっており、特に京田遺跡ではこうした特殊な石製品が出土した（守岡編2017、幡中編2019）。同時期または比較的近い時期に使用された石製品が、常楽寺柿木田1号墳の築造で礫敷SS001の一部に転用されたと考えられる。

(2) くびれ部および前方部の外表施設の調査（第18図、図版23・25・26）

島根県教育委員会が実施した2017（平成29）年度の試掘確認調査では、前方部で埴丘端部を示す痕跡は見つかっておらず、後世の墓地の造成によって、削平を受けた状況が確認された。

今回の調査では、くびれ部および前方部に設けたトレンチのうち、東側のくびれ部2トレンチ、前方部南北2トレンチおよび前方部東西1トレンチの内部を全面的に調査した。詳細はくびれ部と前方

部の墳丘構造の調査において詳述するが、前方部南側の墳丘主軸周辺で後世の墓地造成に伴う土坑が確認され、墳丘面が削平されている様子を確認した。その一方でくびれ部や前方部の北半分のほか、南側の東西端部付近では、墳丘面および墳丘端部が残存していることが明らかになった。墳丘面などが残存する範囲について面的な精査を行ったが、外表施設は確認できなかった。

4 墳丘構造の調査

常楽寺柿木田1号墳において、墳丘規模や墳丘の構築過程を検討し、また墳丘端部を正確に把握して古墳の墳丘構造を明確にするため、後円部、くびれ部および前方部に設定した各トレンチにおける土層堆積状況を詳しく検討した。

(1) 墳丘の規模と構築過程 (第16～18図、図版20・22～26)

後円部東西7トレンチ (第16図)

まずは墓坑STO01の主軸上において墳丘端部および墳丘の規模を明確にするため、後円部東西7トレンチを設定して土層の堆積状況を確認した。

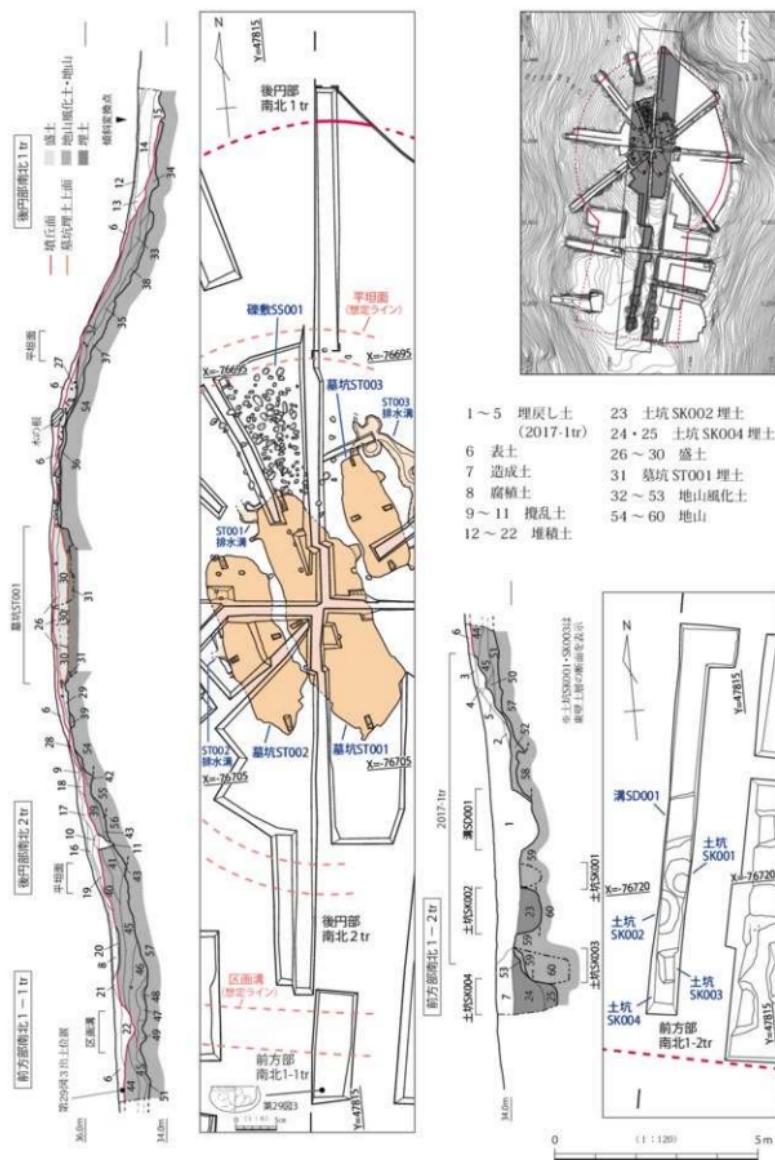
地山(22層)および地山風化土(18～20層)上に表土(1層)と堆積土(2・3層)が存在し、地山風化土の19層から20層の間に傾斜変換点が認められる。この地点が墳丘端部であれば、これまでに想定されていた後円部北側の墳丘端部よりも外側に位置し、墳丘規模も大きくなる可能性が高いと考えられる。

後円部南北1・2トレンチ (第17図)

ここでは墳丘の主軸上に設定した後円部南北1・2トレンチにおいて、後円部の墳丘規模や構築過程を検討する。後円部上では、地山と地山風化土(32・36・37・39・54層)の上に盛土(26～30層)がなされており、墓坑STO01は後円部頂部の地山(54層)を削って平坦に成形した後に地山を掘り込んで形成されていた。墓坑STO01の埋土(31層)上面は若干窪んだ状態であったが、明確な陥没痕はみられなかった。盛土の堆積状況から、埋土直上の盛土(30層)は墓坑STO01全面を被覆する目的で施されたのに対し、その上に堆積する盛土(26～29層)は後円部上面を覆うようになされたと考えられ、盛土上面が墳丘面であると判断できる。盛土の土質は地山や地山風化土と類似する。

後円部南北1トレンチの後円部中段から下段にかけての墳丘面は、地山風化土(32～34層)の上面であると想定でき、地山風化土を削り出して成形したと考えられる。特に盛土が施される32層上面にはかなり明確に平坦面がつくられている。墳丘面の上には表土(6層)および堆積土(12～21層)が堆積する。トレンチ北側では、後円部東西7トレンチの土層堆積状況(第16図)で認められた地山風化土上面の傾斜変換点と同様に地山風化土(34層)上面に傾斜変換点が認められ、それが北側の墳丘端部を示す蓋然性が高い。

後円部南北2トレンチでは、表土(6層)下に堆積土(16～22層)が認められ、その下に地山(54～57層)および地山風化土(39～51層)が存在する。地山風化土(39・40層)上面がなだらかに成形された墳丘面であったと考えられ、後円部の南端裾部で平坦になる。なお、地山(54～57層)は色調や地山礫などの含有状況から、同じ布志名層でも地点によって土質が異なる状況を確認した⁽⁵⁾。



第17図 後円部南北1・2トレチおよび前方部南北1トレチ平面図・土層断面図

前方部南北1－1トレンチ（第17図）

前方部南北1－1トレンチは、墳丘主軸上にある後円部南北2トレンチの延長上に位置し、後円部と前方部の境界付近になると想定された位置に設けた。

土層堆積状況は後円部南北2トレンチと概ね同じであり、地山（57層）および地山風化土（40・44～49・51層）上に表土（6層）と堆積土（20～22層）などが存在する⁽⁶⁾。墳丘面は地山風化土（40・44層）上面であり、一部がやや窪む。窪みは前方部と後円部の境目付近にあり、後世の造成による可能性もあるが、墳丘面を掘り込んでいる。またくびれ部1・2トレンチでも不明瞭ながら墳丘面を掘り込んだ痕跡が確認できるため（第18・22図）、古墳築造に伴い前方部と後円部の境界を区画した溝の可能性がある。

またこのトレンチ内において、前方部と後円部の境界付近にある区画溝の南側の墳丘面（44層上面）で土師器の手捏ね土器（ミニチュア土器）を確認した（第29図3）。表面の風化は大きく進んでおらず、やや破損していたものの、比較的良好な状態で出土しており、概ね原位置を保っていると捉えることができる。手捏ね土器は非日常的な用途が想定され、これらの状況を積極的に評価すれば、後円部裾に近い前方部付近で葬送儀礼が行われたことが推察される。

前方部南北1－2トレンチ（第17図）

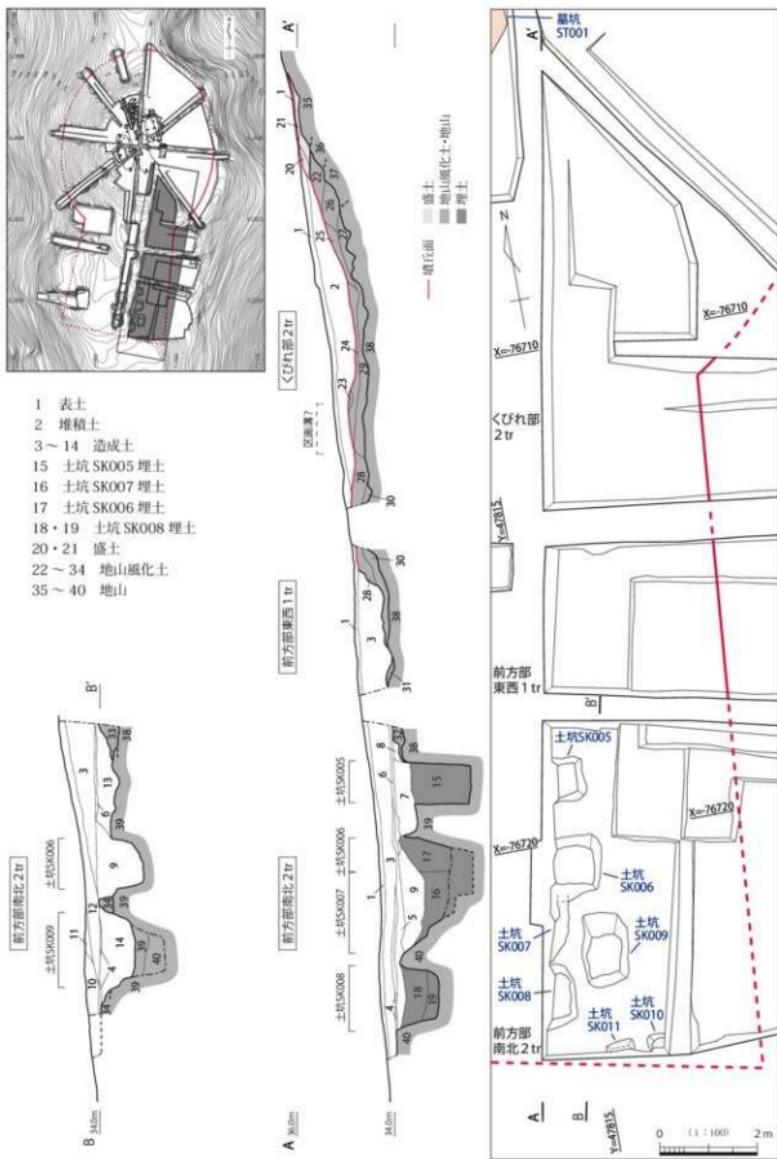
前方部南北1－1トレンチから前方部南北1－2トレンチの北側にかけては、地山風化土（44層）上面において墳丘面が確認できたが、それより南側では明確な墳丘面は確認できなかった⁽⁷⁾。土層堆積状況では、地山風化土（45・50～52層）の上面に2017年度試掘確認調査1トレンチの埋戻し土（1～5層）が存在するほか、造成土（7層）が認められる。また地山（59・60層）および地山風化土（52層）を掘り込む複数の遺構（土坑SK001～SK004、溝SD001）が確認され、土坑内には埋土（23～25層）も認められる。これらは後世の墓地造成に伴う土坑であると考えられる。なお、造成土は墓地造成に伴うものか、それ以降の所産であろう。

くびれ部2トレンチおよび前方部東西1トレンチ・南北2トレンチ（第18図）

後円部南北2トレンチおよび前方部南北1トレンチで認められた墳丘の構築過程や墳丘面についての情報を補足するため、くびれ部2トレンチおよび前方部東西1トレンチ・南北2トレンチにおける西壁の土層堆積状況の検討を行った。なお、前方部南北2トレンチ内では土坑が複数確認されており、その状況を詳しく確認するために、西壁の土層断面（A-A'）と並行して土坑の断面形状が把握できる東側の土層断面（B-B'）を観察した。

① くびれ部2トレンチ

くびれ部2トレンチ西壁の土層堆積状況について、地山（35～38層）および地山風化土（22～30層）の上には北側で盛土（20・21層）、南側で堆積土（2層）が確認され、表土（1層）がその上に存在する。なお盛土は、後円部南北1・2トレンチで確認された後円部上面を覆う盛土の一部である。墳丘面は北側で盛土上面、南側では地山風化土（22～26・28層）上面に確認できる。前方部南北1－1トレンチで確認した区画溝を示す掘り込みが存在した可能性はあるが、くびれ部2トレンチでは明瞭な痕跡は確認できなかった。



第18図 くびれ部2トレンチおよび前方部東西1トレンチ・南北2トレンチ平面図・土層断面図

② 前方部東西1トレンチ

前方部東西1トレンチ西壁では、地山（38層）および地山風化土（28・30・31層）の上面に造成土（3層）と表土（1層）が確認できる。墳丘面は28層上面まで認められるが、南側では後世の造成によって削平されている。なお、造成土は地山まで到達しており、かなり大規模な造成が行われたことが推測される。

③ 前方部南北2トレンチ

前方部南北2トレンチの西壁付近では、近接する前方部南北1-2トレンチと同様に墳丘面は確認できなかった。なお、トレンチの南側を中心に墓地造成に伴う土坑（土坑SK005～SK011）が確認されたが、その内容については次項にて報告する。

（2）後円部の墳丘端部と構築過程（第19～21図、図版20～22）

墳丘全体の規模について、これまで墳丘主軸上のトレンチを中心には墳丘の構築過程を踏まえて確認してきたが、後円部の墳丘端部については、従来想定されていた位置よりも北側に伸びる可能性があることが判明した。後円部の他の箇所でも墳丘端部や構築過程を確認して墳丘構造を明確にするため、後円部の各トレンチで土層堆積状況を検討する⁽⁸⁾。

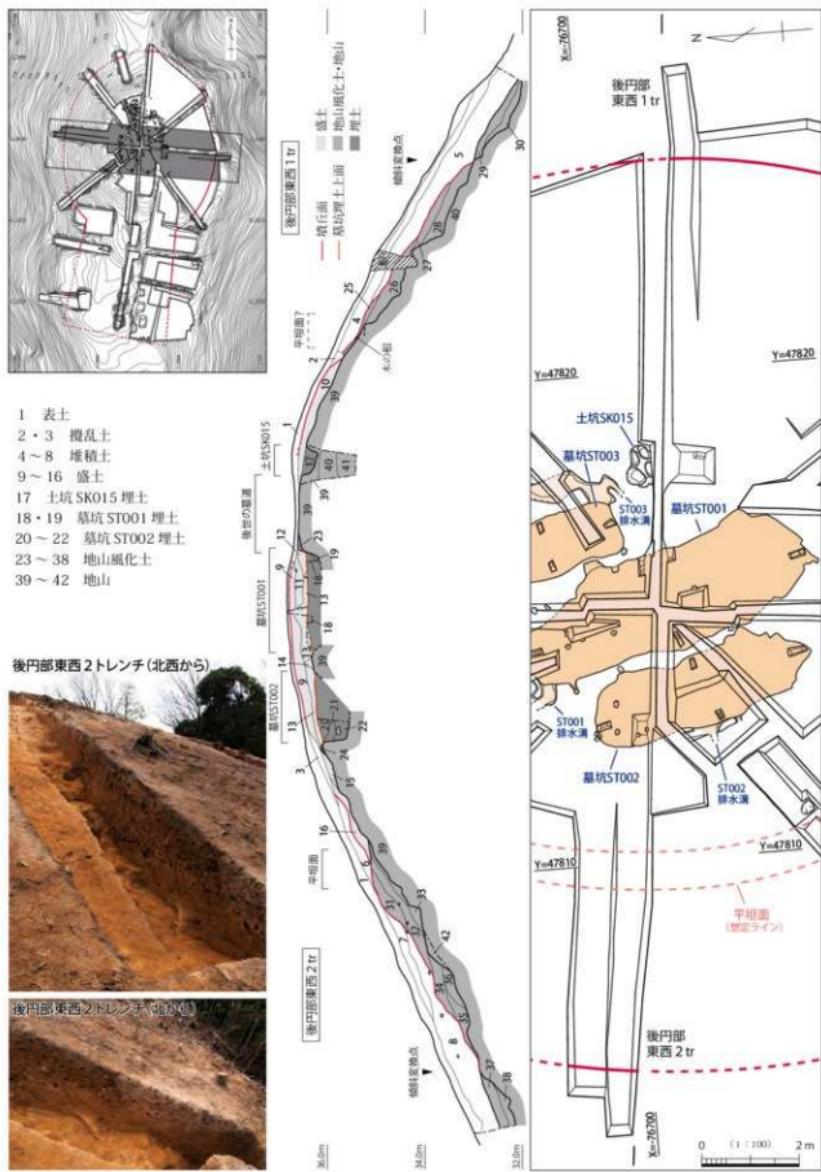
後円部東西1・2トレンチ（第19図）

後円部東西1・2トレンチは墳丘主軸に直行して後円部を東西に横断する位置に設定した。後円部東側2区および3区の全面的な精査のための土層堆積状況の確認のほか、墳丘端部を確認して後円部の東西方向の規模を明確にすることを目的とした。

トレンチは墓坑ST001とST002を横断している。墓坑ST001は墳頂部に近い位置の地山（39層）および地山風化土（23層）を掘り込むが、墓坑ST002は西側斜面の地山（39層）と地山風化土（24層）を掘り込んで形成され、両者の比高がよく分かる。後円部上には盛土（9・11～14層）がなされ、墓坑ST001内部には18・19層、墓坑ST002内部には20層から22層の埋土が認められる。なお、墓坑ST001とST002の間には重複関係は認められない。

後円部東西1トレンチの後円部上では、表土（1層）の下に盛土（10層）を確認しており、後世の墓道によって盛土の一部が削平されているものの、地山面は残存している。また盛土下には土坑SK015が確認され、盛土がなされる前に地山（39層）を掘り込んで形成されたと判断できる。内部には埋土（17層）が存在する。土坑SK015の近くには墓坑ST003およびST003排水溝があり、これらと関連する一連の遺構の可能性はあるが、詳細は不明である。なお土坑SK015の下部は、電気探査で地山の高まりが確認された地点であり（第4章第43図）、その状況を確かめるためにサブトレンチを設けて掘り下げ、39層の下に土質の異なる地山（40・41層）を確認した。後円部中段から下段には堆積土（4・5層）があり、その下に地山（40層）および地山風化土（25～30層）が認められた。それら地山風化土（25～28層）上面が墳丘面であると考えられる。また墳丘面の25層上面には、整っていないが平坦に加工した痕跡が認められる。地山風化土（28・29層）上面に傾斜が変換する地点を確認し、その位置が後円部東側の墳丘端部であると判断した。

後円部東西2トレンチは後円部中段まで盛土（16層）が認められ、墳丘面が確認できる。墳丘面の



第19図 後円部東西1・2トレンチ平面図・土層断面図

上に表土（1層）および堆積土（6～8層）が存在する。後円部中段から下段の墳丘面は地山風化土（31・32・34・35層）の上面であり、35層が途切れる場所に傾斜変換点が確認できる。これが後円部西側の墳丘端部であると判断した。また、後円部中段の地山風化土（31～33層）上面は平坦に成形され、その上面に盛土（16層）が堆積している。この状況から判断すると、墓坑を形成し、墳丘面を成形するのに合わせて地山を削り出して平坦面を作出したと考えられる。なお、後円部東西1トレンチでも不明瞭ながら平坦に加工した痕跡があるが、これも同様の性格を持つ可能性がある。

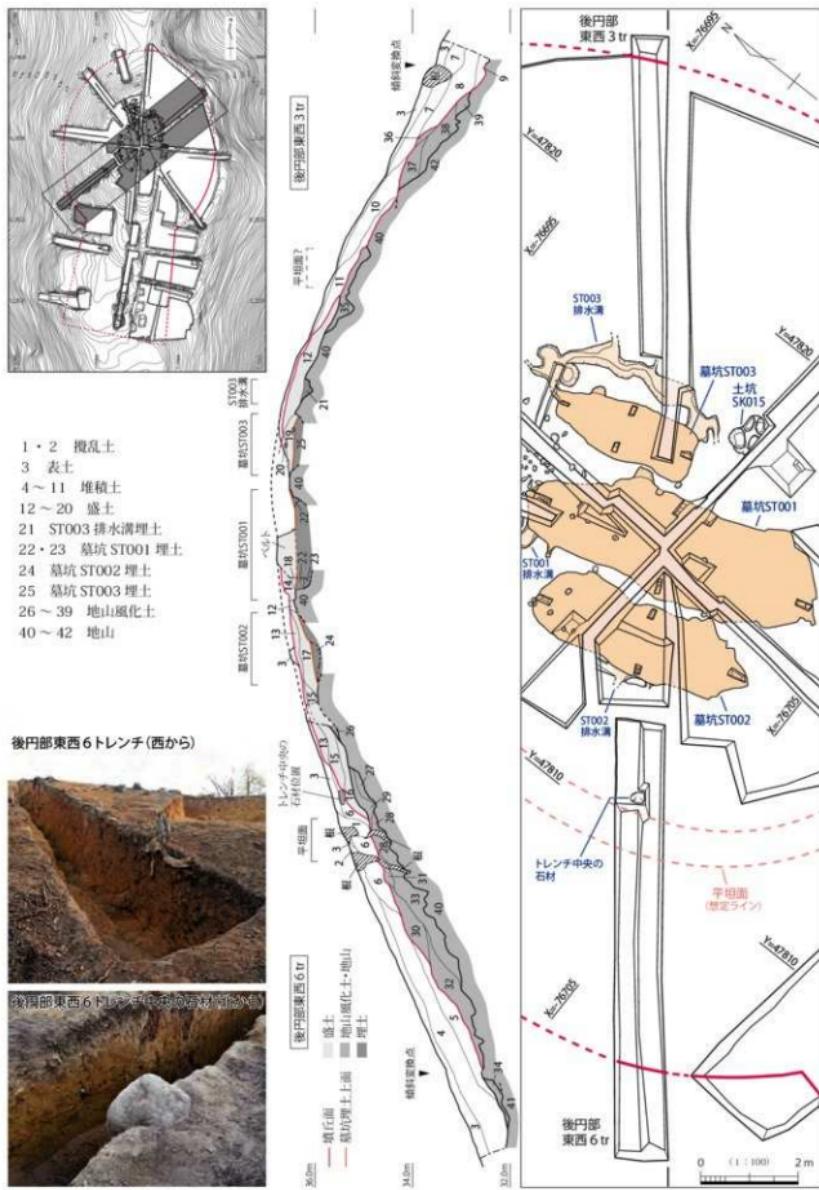
後円部東西3・6トレンチ（第20図）

後円部東西3・6トレンチは、墳丘主軸とその主軸に直交する後円部の東西横断ラインの間に設けたトレンチである。後円部東側1区の全面的な精査に伴い土層堆積状況を確認するために設定し、また後円部南北1・2トレンチおよび後円部東西1・2トレンチで認められた後円部の墳丘端部の痕跡について補足的に捉えることも目的としている。

後円部東西3・6トレンチは、北東方向から南西方向にかけて墓坑ST001からST002およびST003を横断しており、それぞれの形成の状況が同時に確認できる。墓坑は地山（40層）を掘り込んで形成されるが、これら3基には重複関係ではなく、墓坑ST001は墳丘頂部、墓坑ST003は墳丘頂部からやや東側に形成され、両者の上面は概ね同じ高さで揃っている。一方、墓坑ST002は西側斜面に形成されており、墓坑ST001とST003よりもやや低い位置にある。これら墓坑は地山面をある程度平坦に成形した後に掘り込まれたと考えられる。墓坑ST001内部には2層の埋土（22・23層）が認められたほか、墓坑ST002とST003ではそれぞれ上面で埋土（24・25層）を検出した。なお、墓坑ST003の東側には排水溝（ST003排水溝）とその埋土（21層）がみられる。後円部上には盛土（12～20層）が確認でき、墓坑ST001上面には18層、墓坑ST002上面には17層、墓坑ST003上面には19層がそれぞれ認められる。

後円部東西3トレンチでは、表土（3層）下に堆積して後円部上を覆う盛土（12層）が認められる。後円部中段から下段にかけては、堆積土（7～11層）の下で確認できた地山（40・42層）および地山風化土（35～39層）の上面が墳丘面であると思われ、地山（40・42層）上に認められた傾斜変換点が墳丘端部にあたると考えられる。その他、地山風化土上面には後円部東西1・2トレンチの中段付近で認められた明確な平坦面は確認できなかった。

後円部東西6トレンチの後円部上の表土（3層）下には盛土（13～16層）が認められ、中段付近まで広がる。後円部中段付近のトレンチ中央部では、盛土に人頭大の石材が単独で確認でき、石材の検出時には葺石の一部であることも想定したが、周辺を精査したものの広がりが認められないため、後世の造成などに関連した石材の可能性がある。後円部中段から下段にかけて確認できる地山（40・41層）および地山風化土（26～34層）のうち、地山風化土（28～32層）上面が墳丘面であると考えられ、後円部下段の地山（40層）上の傾斜変換点を墳丘端部として捉えた。また盛土が途切れる後円部中段の28層上面は、なだらかな平坦面が認められる。根の嵌入などがあり不明瞭であるが、人为的な平坦面の可能性がある。墳丘面の上には堆積土（4～6層）がみられる。なお、前述の単独出土した石材が後世の造成などに伴う場合、6層はその当時の造成土の可能性がある。



第20図 後円部東西3・6トレンチ平面図・土層断面図

後円部東西4・5トレンチ（第21図）

後円部東西4・5トレンチは、後円部東西3・6トレンチと同じく、墳丘主軸とその主軸に直交する後円部の東西横断ラインの間に設けており、後円部東西3・6トレンチと直交する。トレンチは墓坑ST001を横断しており、墓坑ST001は平坦に成形された地山（36層）を掘り込んで形成されている。墓坑ST001の埋土（11層）上面を検出し、その上を覆う盛土（9層）を確認していた。

後円部東西4トレンチの後円部上段から中段では、表土（1層）下に盛土（10層）が見受けられる。後円部中段から下段にかけては堆積土（4～7層）が確認でき、その下に地山（36・38～40層）および地山風化土（24～35層）が認められる。墳丘面は地山風化土（26・27・30層）の上面であると考えられ、地山風化土の35層との間に確認した傾斜変換点が墳丘端部を示していると捉えた。この墳丘端部の位置および後円部東西1トレンチで検討した墳丘端部の位置をもとに後円部東側3区を精査し、墳丘端部ラインを復元した。なお、後円部中段の地山風化土（30層）上面には平坦面を作出した明確な痕跡は認められなかった。30層には根が嵌入しており、攪乱を受けた可能性も考えられる。

後円部東西5トレンチは基本的に後円部東西4トレンチと同様の土層堆積状況を示している。後円部上では表土（1層）下に盛土（8層）が確認できる。盛土は他のトレンチで確認された状況と異なりやや薄い⁽⁹⁾。後円部中段から下段にかけては、地山（36・37層）および地山風化土（12～23層）の上面に堆積土（2・3層）が認められ、地山風化土（13～17層）上面が墳丘面である。13層と23層の間に傾斜変換点が認められ、墳丘端部を示していると考えられる。なお、後円部中段の地山風化土（17・19層）上面には平坦面が認められる。

（3）くびれ部の墳丘端部と構築過程（第22・23図、図版23）

くびれ部ではトレンチを2箇所（くびれ部1・2トレンチ）設けて土層の堆積状況から墳丘端部と構築過程を検討する。くびれ部1・2トレンチは、2010（平成22）年度に島根県教育委員会が実施した試掘確認調査の位置をもとに設定しており、くびれ部1トレンチは2010年度試掘確認調査の1トレンチと同じ位置で、当時の埋戻し土を取り除いて上層の堆積状況を確認した。くびれ部2トレンチも同様に2010年度試掘確認調査の2トレンチの位置をもとに設定し、当時の埋戻し土を除去したが、今回の調査で墳丘東側を全面的に調査して外表施設の有無や墳丘端部の想定ラインを確認するため、トレンチの東側および北側を拡張して全体的に広げている。

くびれ部1トレンチおよび前方部東西2トレンチ（第22図）

くびれ部1トレンチは、東壁を南へ延長すると前方部東西2トレンチの東壁とつながり、墳丘のくびれ部から前方部の土層堆積状況が一連で把握できるため、ここで検討する。くびれ部1トレンチ東壁および前方部東西2トレンチ東壁では、表土（1層）と堆積土（3層）の下に地山（16・20・21層）および地山風化土（6・9・13～15層）がみられる。墳丘面は、北側が一部削平を受けている可能性はあるものの、地山風化土（6・9・13層）の上面であると考えた。また13層上面において緩やかな窪みがみられ、前方部南北1-1トレンチで確認した掘り込みと同様、これが古墳築造当時のものであれば、前方部と後円部の境界を示す区画溝の一部である可能性がある。

くびれ部1トレンチの北壁と西壁は、基本的に東壁と同じ土層堆積状況であり、表土（1層）と堆



第21図 後内部東西4・5トレンチ平面図・土層断面図

積土（2～5層）の下に地山（16～19層）および地山風化土（6～12層）を確認した。墳丘面は地山風化土（6～9層）の上面と考えられ、墳丘端部は7層が確認できなくなり、傾斜変換点が認められた位置と考えられる。なお、前方部からくびれ部、後円部にかけての墳丘端部のラインは、ここで確認した墳丘端部の位置に加え、後円部東西6トレンチの土層断面図（第20図）で確認した墳丘端部、および後述する前方部東西2トレンチの土層断面図（第25図）における墳丘端部から復元した。

また2010年度試掘確認調査では、くびれ部周辺で土師器の甕（第28図）が出土した。比較的残存状況が良好で、出土地点は原位置に近い場所と考えられ、復元した墳丘端部ラインや関連資料などから、前方部付近のくびれ部の地山風化土上面付近であった可能性がある。

くびれ部2トレンチ（第23図）

くびれ部2トレンチの土層堆積状況は他のトレンチと概ね類似し、表土（3層）と堆積土（4～8層）の下に地山（13・14層）および地山風化土（9～12層）が認められる。墳丘面は地山風化土（10層）上面であり、10層が途切れる傾斜変換点が墳丘端部を示すと考えられる。土層堆積状況の検討から確認できた墳丘端部をもとにトレンチ内の全面的な精査を行い、墳丘端部のラインを想定した。

またトレンチを東側に拡張するなかで、根による攢乱土（2層）から須恵器の环身（第29図4・5）が出土した。これらは古墳時代終末期頃に比定され、この時期にも丘陵上で人々の営為があったことを示している。

（4）前方部の墳丘端部と構築過程（第24～26図、図版24～27）

墳丘主軸上の前方部南北1～2トレンチの土層堆積状況（第17図）では、前方部南側での明確な墳丘面や墳丘端部は確認できなかった。よってここでは、前方部の各トレンチで前方部東西の墳丘端部や墳丘端部ラインの確認によって墳丘構造を明確にするため、土層堆積状況を詳しく検討した。

前方部南北2トレンチ（第24図）

前方部南北2トレンチは、前方部東側の墳丘端部とそのラインを想定するために設定した。西側には後世の墓地造成に伴うとみられる複数の土坑が確認されており（土坑SK005～SK011）、くびれ部2トレンチおよび前方部東西1トレンチ・南北2トレンチにおける土層堆積状況（第18図）によって土坑が形成された状況を確認している。

前方部南北2トレンチの西側は後世の墓地などに伴う造成が行われていたが、東側に墳丘面が残存するのかを確認するため、北壁の土層堆積状況を検討した。表土（1・2層）が堆積する下には、造成土（3～6層）が厚く堆積する。造成土のなかでも特に5層は固く綿まり、造成に伴う整地面であったと考えられる。造成に伴う整地面は西壁でも確認されており（第18図）、整地面の上に厚く堆積する造成土（3・4層）は、その後に改めて造成されたことを示している。堆積土（7～15層）は造成土下に認められ、その下に地山（18層）および地山風化土（16・17層）が存在する。なお、堆積土は前方部東西1トレンチと同様にかなり厚く、後世の墓地造成を含む複数の造成による掘削土が堆積した状況であると思われる。全体的に削平されており、墳丘面は地山風化土（16層）上面であったと考えられるが、明確には把握できなかった。そのため、くびれ部2トレンチや前方部東西1トレンチの土層堆積状況（第23・25図）で確認できた墳丘端部をもとに墳丘端部ラインを想定した。